

---

# 君の笑顔が生きてる僕の証

哀loveコナン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君の笑顔が生きてる僕の証

### 【Nコード】

N4168X

### 【作者名】

哀loveコナン

### 【あらすじ】

作者は感動ものが大好きです。

そして、コナンも好きで、

そしたら…こんな話をおもいついてしまいました。

コナンは病気になるりますが、しなせません。

ご心配なく、読み進めてください。

## 平和なひととき

“行つてきまーす”

月曜日の朝、大きな声で挨拶をし、学校へ出かけるコナン。

それを微笑みながら…。

“行つてらっしやい”

と、送り出す蘭。

小五郎も、せかせかと依頼者の元へ出かける支度をする。

そんな、たわいもない日常が、ある時を境に一気に崩れはじめた。

“おはようございまーす”

ここは…帝丹小学校の1年B組。

担任の小林先生の声に元気に答える生徒達。

また、月曜日の朝がやってきた…。

“はあー”

とため息をつく、コナンに灰原は呆れながら、言い放つ。

“算数なんてやってらんないって感じね…”

“あつりめーだろ”

と、だるそうに答えるコナンは、頬杖をつきながら、めんどくさそうに授業を受けている。

## 前触れ

### ― 体育の授業 ―

“今日はみんなでドッチボールをやりましょう”

小林先生の提案で、ドッチボールをやることになったB組のみんなは大はしゃぎ。

白線をひいたり、ボールを用意したりする生徒の中、コナンは一人佇んでいた。

そこに哀がやってきて…。コナンのおデコを触って見ると…。

“ちょっと、あなた…熱いわよ”

その様子に気づいた小林先生が、駆け寄ってきた。

“江戸川くん、どうしたの？”

“あっ、なんでもないです”

小林先生の問いかけに、なんでもないと答えたコナンにイラストした哀は…。

“なんでもないわけではないでしょ。こんなに熱いのに…”

“とりあえず、保健室行きましょ。”

と、少々強引に連れられた。

―保健室―

“38.4…。ちょっと高いわね…。  
今日はこのまま早退した方がいいわ”  
“大丈夫だよ”

コナンの我が儘をダメつと一喝する。

その後、教室にランドセルを取りに行き、なくなり、コナンは帰宅した…。

コナンが帰った後、哀は小林先生にコナンの様子だと、素直に帰りそうもないから、家に電話した方がいいと、頼んだ。

そして、帰宅中。

“はあくまだ、こんな時間がよー”

コナンは腕時計を覗き込むと、時刻はまだ12時前。こんな時間に帰ったら、余計な心配させてしまう。

とりあえず、夕方まで博士の家にいることにした。

事情を話し、博士の家でくつろいでいると、一本の電話が鳴った。

“おお、哀君か。えっ、新一？”

その言葉を聞いたコナンは慌てて、“しー”と伝えると…。



## 哀の説教

“いや、新一は来とらんぞー”

と、話してはくれたものの、哀にはバレバレで、“いいから、代わってちょうだい”と凄まれてしまい、仕方なく、コナンに受話器を渡した。

コナンはバツを手で作って合図はするもの…

“無理じゃ、ばれとる”

と言われ、仕方なく受話器を受け取り、はあくため息を一つしてから、電話に出た。

“どした？”

“どしたじゃないわよっ。あなたそこで何やってるのよ？まっすぐ家に帰りなさいって言われたでしょ？”

哀の説教の始まりだ。

“いいじゃねーか、少し位”

“いいから、今すぐ家に帰りなさい！これ以上風邪が悪化しても知らないわよっ。最も、これ以上遅くなったら、蘭さんの長いお説教聞くことになっていいなら、そこにいれば？”

蘭という言葉聞いたコナンは、ドキッとして、哀に尋ねた。

“蘭に行ったのか？”

“ええ、あなたの様子からして、素直に帰りそうもないから言っ

といたわよー。今頃心配して探してる頃だろうから、そのうち、迎えに来るんじゃない？  
わかったら、今すぐ帰りなさい。いいわねっ？  
そこできられてしまった。

コナンは博士に受話器を返すと、ため息をして、帰ることにした。

“じゃあ、帰るよ博士”

“おお、気をつけるんじゃないぞ”

風邪に寄る体調不良もたたって、探偵事務所までの道が遠く感じていた。

もう少しで探偵事務所だと言うところで、蘭にバッタリ会った。

“コナンくん！”

？あつ、蘭ねえーちゃん…”

と、呼ぶと蘭はコナンに詰め寄り…

“あつ、蘭ねえーちゃんじゃないわよまったく…。”

と、呆れていた…。心配で心配でたまらない顔をしている彼女を見ると、罪悪感が芽生えてくる。

“よかった”と、ホツとして、コナンの背からランドセルを降ろすと、コナンの手を繋ぎ…

“帰ろう”

と言って、歩き出した。思ったよりも、怒られなかったのも、半ば安心しきっていたが、今は体調を気遣っているんだと思うと、嬉しさが、こみあげてきた。

探偵事務所に着くと、小五郎が心配な顔して立っていた…。

コナンと蘭のすがたを発見すると、ホツとしながら、詰め寄り…

“ごらー、コナン！どこほつつきやがってたんだ？”

と、頭をくしゃくしゃ掻き乱した。

“お父さん、今日は怒らないで、もう反省してるよね？コナンくん？”

“うん”

そう言って、笑ってる見せると、安心したのか小五郎が、“早くねろっ”と、言い放った。

## その夜…闇の扉が開いた

階段を一段、一段、登って行く途中、コナンはつまずくはずもない階段でよろけた。

それを見ていた蘭が、慌ててコナンを支えて心配している。

“大丈夫だよ”

と、笑顔を作って見せるが、余計に蘭を心配させてしまう。

布団に入って、蘭の作ったお粥を食べ終わるぐらいに、蘭が入ってきた。

“コナンくん、食べ終わった？”

“うん。”

蘭に渡された薬を飲むと、睡魔が襲って来たのか、そのままねてしまった。

その夜…8時ごろ、それは突然起こった。

急な喉の痛みをかんじ、咳き込むコナン。普段は治まるはずの咳が何分も続いている。

次第に、頭痛もしてきた。その咳に気づいたのか、蘭と小五郎が心配しながら、入ってきた。

“コナンくん！どうしたの？”

そついいながら、コナンの背中をさすっている。

“おい、大丈夫か？”

小五郎も、尋常ではない咳の仕方に、不信任を抱き、救急車を呼びに行った。

その間、蘭はコナンくんの背中をさすり続けていたが、咳ではなく、呼吸を乱すようになっていた。

“コナンくん…もうすぐ救急車来るから、もう少し頑張ってね”

次第に、胸が苦しくなり、胸を抑えながら、弱くなっていく、コナンの荒い呼吸が静かになり、その場でうつ伏せになって、倒れてしまった。

“…!!!”

コナンくん!!!”

救急車が到着し、意識がないコナンを担架に載せて救急車へと運ぶ隊員の後ろを蘭はコナンの姿を覗き込みながら、ついてゆく。

救急車に乗ったコナンは、すぐさま、酸素マスクをつけられ、隊員達による、身体検査が行われた。

蘭と小五郎も付き添って、救急車は米花総合病院へと向って行った。

## 病室での蘭の思い

病院へつき、すぐさま、救急治療室へ運ばれたコナン。

外では蘭と小五郎が心配そうに治療室のドアを眺めていた。

“大丈夫だよな？コナンくん…”

“大丈夫に来まってらー”

小五郎に慰められながらも、祈り続ける蘭。

30分後、コナンは酸素マスクをつけられたまま、ストレッチャーに乗せられ、出てきた。

すぐに、病室に運ばれたコナンは、看護婦さんによって、点滴を付けられ、そのまま、スヤスヤと眠っていた。

その間、小五郎と、蘭は先生と話しをしていた。

“まだ、はっきりしていないんですが、今回のコナン君の様子からみて、ただの風邪だとは思いいくいです”

“どういうことですか？”

驚いた。いつもの風邪だと、油断していたコナンの病状が、風邪じゃないなんて…。だったら、一体なんだってどういうの？蘭は先生の言葉を待ち続けた。

“とりあえず、明日から検査入院をしてもらって、調べてみましょう”

う。なので、しばらくは、学校をお休みさせてください。”

まだ、わからない…。もし、大変な病気だったらと、蘭の心を掻き  
筆る…。

いつからだった？

コナンはいつから、体調悪かった？

考えても、思い当たらない。いつも、元気にしていたもの。いつだ  
って、明るかった。元気がない時なんてなかったもの…。

どうしてこんなことになったの？

どうして…？

蘭は気付いてあげられなかったコナンの身体がなんともありません  
ように。と、願うばかりだった。

病室で寝ている、コナンの元へ行くと、先ほどの辛さなんてなかつ  
たかの様に、スヤスヤと、寝息を立てて、寝ていた。

“わたし、今日はコナン君のそばに居てあげるわ”

小五郎にそういうと、コナンの手を握り、頬に当て、コナンの顔を  
しっかりみた。

コナンの前髪をさすりながら…。

“ゴメンね…気付いてあげられなくて…ゴメンね”

とつぶやいた。



## 小さな反抗

チユンチユンと、スズメのなく声が響く中、コナンはまだ、目を覚まさないでいた。

蘭が見守る中…。

“んっ…ん…ん…あ。”

点滴が視界に入る中、蘭がコナンの顔を覗いた…。

“蘭ねえーちゃん…”

その声にホツとした蘭は笑顔を見せた。

“よかった…コナンくん…。大丈夫？”

昨日の記憶が途中からなくなっていったコナンは、どうして…どうしているかがわからなかった。

辺りをキョロキョロしていると…。

“ここ、病院よ…”

“えっ？病院？”

“そうよ。コナンくん、昨日運ばれたのよ…覚えなの？…あっ、そっか。コナンくん、途中で気を失っちゃったんだっけ…”

そのあと、蘭が一部始終を教えてくれて、ようやく理解できた。

“だから、検査入院するから、しばらく学校お休みよ？検査の結果が出るまで、我慢しててね”

そう言われた蘭の言葉に、内心がっかりしていた。

“じゃ、先生呼んで来るからね”

そういい、蘭は病室から出て行った。

そのすきに、コナンは酸素マスクと、点滴を外し、ベッドから降りた。息苦しさがあつたが、構わず、立ち上がるうとした時、目眩まですてきた。

それほど、弱ってしまった自分の身体にも関わらず、大丈夫と言い聞かせ、病室の窓から抜け出した。

思う様に動けない自分の身体を支える様に、壁づたいに、歩き、どうにか、博士の家までたどり着いた。

博士に心配されたが、蘭が大袈裟なんだと誤魔化し、服を着替えて、いつも通り、学校へ登校した。

すこし、歩いたせいかわ、いつも通りに歩ける様になった。なんとか間に合った、教室では、昨日のことを、皆に心配されたが、平気だといまかした。

そして、小林先生が教室に入ってくるなり、言った言葉は…。

## 蘭のお迎え

“ あっ、コナンくん、やっぱりいた。だめじゃない、黙って病室を抜け出したりしたらー”

バレバレだった。

“ 毛利さんが心配して電話してきたのよー”

その瞬間、どよめきが起こった。

“ コナンくん、入院してたんですか？”

“ 何やってんだよオメー”

“ お医者さんのいうこと、ちゃんと聞かなきゃダメなんだよ”

少年探偵団のお説教である。

“ で？何で入院してたの？あのあと、連れていかれたの？”

“ えっ？いやー、、、それがその”

言わずらそうにしていたコナンを遮って、小林先生が教えた。

“ 昨夜、咳こんで布団の中で倒れて、朝まで病院にいたのよねー？  
コナンくん？”

“ えっ、う、うん…。”

“ ええええええ”

“ ダメじゃないですかあー？”

“ そうそう、だめよね？今すぐ戻らないと、蘭さんの空手で、どうなっても知らないわよ？”

そんな冗談言っていると、廊下から、駆け足が聞こえてきた。

“ コナンくん！ダメじゃない、病院抜け出しちゃあ…今すぐ戻ろう？”

蘭が、コナンの手をひいて、行こうとした時…。

“ 大丈夫だよ、蘭ねえーちゃん…咳だって治まったし、風邪も治ったから…”

“ そんな事いって、ひどくなったら、どうするの？それに、検査入院するだけだから、少しの間我慢して…ね？”

蘭の言葉に、しぶしぶ了承した。

“ ということなので、1週間、お休みしますので、お願いします”

そう、挨拶すると、コナンの手を引き、病院へ戻って行った。

当然ながら…病院へ戻ると、小五郎や主治医は大激怒。コナンはコテンパンに怒られたのだった。

もう、絶対しないと約束させられ、病室に戻された。とりあえず、途中で倒れたり、発作が起きることがなかったので一安心した…。

## 哀の再来

“ 検査入院だけだから…終わるまで、しばらくの辛抱だから、それまで、いい子で寝てようね？”

“ はーい ”

とはいいつつも、コナンは退屈で仕方なかった…。とりあえず、明日から検査が始まることになった。

鎮痛剤を打たれ、眠っていると、夜、喉の痛みによって目が覚めた。  
“ ケホ、ケホ、ケホ、ケホ…”

軽い咳だったが、また、しばらく続いた…。無茶して病院を抜け出したから、こうなったのかな。と反省しつつ、咳が止むのを待っていた。

蘭は書置きを残して帰ってしまったようだ…。

こういう時、いないと心細いものだ。

その時、病室の扉があいた…。

苦しそうに咳をしながら胸を押さえてるコナンを見て、その人物は悲鳴のような声をあげた。

“ くっ、工藤君！！…ちょっと、大丈夫？”

“ はっ、灰原…”

片目を懸命に開いて哀を見るコナンはとても辛そうで、今にも倒れそうだった…。額には大量の、汗が流れていた。

哀は、急いでナースコールを押し、医者呼んだ。

“何で、ナースコールを押さなかったの？その咳いつから？”

“すぐ…ケホ、ケホ…。治まると思ケホ、ケホ…。ったから…ケホ、ケホ…。多分、20分ケホ、ケホ…”

“20分も…？何やってるのよ…”

驚いた哀だったが、それ以上は責められなかった。辛そうになりながらも、懸命に答えるコナンは、いつも自信たっぷりのコナンとはえらい違いだった。

しばらくして、医者が到着した。コナンの様子を見てすぐ、慌てた様子で、処置を始めた。

“コナンくん、大丈夫だからね…”

と言いながら、背中をさすると、仰向けに寝かせた。

酸素マスクをつけ、空気を送り込む。その時も、ずっと胸を押さえ続けてる。

苦しさが、収まらないらしく、どんどん息が荒くなって来る。

コナンは横に向きたがっている様子で医者も、それを汲み取り、横に向かせ、懸命に背中をさすっている。

そのうち、楽になってきたのか、呼吸も落ち着いてきた。医者も、コナンの様子をみて、深呼吸を促した。

“ふう、もう大丈夫だよ。コナンくん。痛いところはないかい？”

と聞く医者に対して、首を横に振る。ニツコリして哀に、“もう大丈夫ですよ！一応、家族の方にこの事は、伝えておいてください。”と言いつつ、医者達は、病室を後にした。

“はあー、はあー…”

落ち着いた様子のコナンを見て、呆れ半分で見っていた哀は…

“電話して来るわ…”

と言いつつ、病室をでた。

哀からの電話をもらって、驚いた蘭だったが、“落ち着いた”との言葉を聞いて、安心していた。

今日は面会時間すぎてしまうから、また明日来た方がいいという、哀の言葉に納得した。病室に戻った哀は、コナンのそばに行き、口を開いた…。

“自業自得ね。無理して病院抜け出したりするから…。ま、これに懲りて、おとなしくしてるのね…”

検査をしてない今の状況では、治療方法が限られて、発作が起きた時の処置方法がすくない…。

まあ、歩く事も出来ないだろうから、抜け出す心配はないだろうと、安心していた。

“灰原：俺、何かの病気なのか？”

“分からないわ：私は医者じゃないもの。とりあえず、検査してからって言ったから、それまでは、大人しくしているのね：。”

哀は少しの沈黙の後、眠そうになっているコナンを気遣って、“帰るわ：”と言い残し、病室を後にした：。

大丈夫、工藤君だもの：何とか乗り切るに決まってるわ。哀は自身自身に言い聞かせる様に、つぶやいた。



## 目覚めた朝は

—翌朝—

まだ、眠っているコナンのそばに寄り、心配そうに見ている蘭。それを見守る小五郎がいた。

“ん——”

静かに目を開けたコナンはどこか、辛そうだった。そんなコナンを見て、ニツコリ笑い……

“おはよう、コナンくん……”

“蘭ねえーちゃん……おはよう……”

コナンもニツコリ笑っていた。

“大丈夫かあ、コナン？”

“大丈夫だよっ”

小五郎の心配をよそに、何もなかった様に答えるコナンは、辛そうだ。

“今日から、検査だからねっ、頑張ろうね。”

“うん。”

静かに答えるコナンは、病状が進んでるかの様な、青白い顔に変化

していた。

大丈夫、大丈夫…。

自分に言い聞かせる様に、祈る蘭は、コナンの前では、どんな時があっても、笑顔でいなきゃと思っていた。

“思ったより、元気そうでよかったわ…何かあったら、押すのよ？”

と、ナースコールをコナンの手に握らせ、“行って来ます”といい、後は小五郎に任せて学校へ向った。

## 蘭の笑顔が消えてゆく

それから、3日間、コナンは検査ばかりの日々に明け暮れていた。その間、一度発作は起きたものの、大きな変化はみられなく、安心していた…。

―そして検査結果―

検査の結果がでたというので、蘭と小五郎は呼ばれた。

レントゲンを見ながら、主治医はコナンの病状についてかたり始めた。

その結果には、思いもよらぬ最悪な事実を聞かされてしまった。

“ いろんな検査をした結果：急性喉頭蓋炎という病気の可能性が高いと、判断ができました。急性喉頭蓋炎とは、今のコナン君の症状と同じ、喉の痛みで咳が長く続いたり、胸が苦しくなったりする病気で、通常、抗がん剤の投与で治す事ができるのですが、コナン君はまだ子供で、まして、病気になってしまった事で体力も落ちています。今のコナン君の体力だと…治す事が、非常に困難な病気なのです。”

“ じゃあ、コナンは…？”

“ もって、2ヶ月がいいところでしょう。”

沈黙が流れた…。思ってもいない事を言われ、強い衝撃で頭を叩か

れた気がした。

コナンの病室に戻る途中、蘭は…涙が出て来た。こんな気持ちで、コナンくんに会えない。どんな顔していえばいいの？

主治医に言われた、コナンくと過ごす残りの日々を精一杯の笑顔で過ごしてあげてください。

“私は…コナンくんにあつて…笑顔でいられるのかな。？”

“蘭、お前は今日は帰れ。後は俺が付いてる”

蘭も分かっていた。こんな顔した蘭の顔を見たら、悲しむってわかっていた。

でも、主治医の言った残りの20%にかけてみたい蘭は…。

“そうね、こんな顔じゃ、コナンくんの前で笑えないもの。”

そう、言い残して病室を後しにした。

## 検査結果直後の発作

小五郎が、コナンの病室に行くと、探偵団が来ていて、コナンは咳き込みながらも、話しをしていた。

“おい、お前らー、コナンはまだ喉治ってないんだからーあんまり喋らすなー”

“あれっ？おじさんっゲホ……蘭ねえーちゃんゲホ…は？”

小五郎が入ってきた事がわかったコナンは蘭の存在がない事に気づき、聞いた。

“あゝ、なんか用事があるからって先に帰ったぞ。明日また来るぞうだ”

“ふーん”

残念な顔しているコナンの顔を見る小五郎は病気の事を言えないでいる。

“ところでおじさん、ゲホ…検査結果は？？ゲホゲホ…”

と聞くコナンの咳が、酷くなってる事に気づき、背中をさすりながら、話す。

“オイオイ、咳がひどくなってるんじゃないのか？まあ、検査結果は心配する事ない。ただの扁桃腺が腫れが長引いてるだけみたいだからなあ。”

“本当っ？ゲホゲホ…じゃ、じゃあ…ゲホ…退院していい…ゲホゲホゲホゲホ…”

の？

と聞こうとしたのに、上手く声が出ず、そのまま、咳がひどくなり、肩で呼吸をするしかない状態になっていた。咳も酷く、呼吸も荒い。子供達がみてもとても大丈夫な風には思えなかった。

“おい、コナンっ！”

小五郎は慌てて、ナースコールを押し、“すぐ来てくれっ”と一言いうと、後はコナンの背中をさすっていた。

数分後、ガラガラと音と共に、医師達が病室に入ってきた。

酸素マスクをつけたコナンの呼吸を助けるのは、呼吸ポンベを使うしか、他はなかった。

仰向けに寝かせたコナンのシャツを脱がせ、胸の辺りに、薬を塗りこむ。少し、楽になってきたのか、呼吸が落ち着いて来たのがわかる。呼吸ポンベの強さをあげて、やっと落ち着くコナンの呼吸は、悪化を物語っていた。

鎮痛剤をうち、眠りにつくコナンだが、その顔は、あまりにも苦しそうな顔をしていた。

落ち着いたコナンの様子を確認すると、皆で部屋を出る…光彦が小五郎に尋ねた……。

## 頼みの綱は探偵団

“あの、おじさん…コナンさんの検査結果…本当に大丈夫だったんですか？”

少しの沈黙のあと、小五郎は3人に諭す様に話す。

“お前達、今からいう事、受け止める事ができるか？”

3人は顔を見合わせ、頷いた。

“実はなー、コナンはもう長くは生きられないんだ。”

さすがに驚いているだろう。みんな、泣きそうになっているのかわかる。

“だが、コナンにはまだ、言わないでおきたい。治る確率が0%ではないからな。主治医は治らない方が高いと言っていたが、…。俺は、ほんの20%にかけたいと思ってる…  
いいか、君達が、コナンにしてあげる事は、いつも通りの笑顔で例え、助からなかったとしても、最後まで仲良くしてあげて欲しい。  
一番嬉しいのは、お前達の笑顔だ。わかってくれ。友達になっくて、ありがとな…最後まで、よろしく頼む”

“はい…。”

小さく頷くと、しばらくしょんぼりしていたが、顔を見合わせ、頷くと、病室にまた入って行った。

あいつら、強い子達だな…。話して良かったと、小五郎は微笑む。

病室に入った探偵団達は、眉間にシワを寄せ、辛そうに眠っているコナンの顔を眺めていた。

“コナンくん…”

ポツリ、あゆみがつぶやくと……。

“んっ……”

コナンが目を覚ました。しばらく、ぼーっとしていたコナンだったが、あゆみたちの気配に気づき、顔を向ける…。

“お前ら…わりい、俺っ”

そっぴいながら、起き上がるようにするコナンを“ダメ”と止めるあゆみに…

“平気だって、検査結果も問題なかったみたいだし、近々退院できそうだしな…だから、心配すんな…”

コナンの言葉に負けたのか、黙ってしまった。

片手で体重を支え、右手で胸を押さえていた。起き上がるのに、時間がかかる様になってしまっている事に、コナンはまだ、病気だと、気づいていない。



酸素マスクまで外そうとするコナンに必死で止める探偵団…。

“これがあると、しゃべりずれーんだ…”

“それだけはダメ。お願いコナンくん…”

と、無理やり外そうとするコナンを必死に止める探偵団に負け、コナンはわかったと、外すのはやめた。

コナンは自分達のために無理してると思った3人は、そろそろ帰ると、いい残し、帰って行った。

元気よく、またなというコナンを3人も、元気よく、手を振る…。

## 哀の悲鳴

元太達が帰ったあと、病室で一人考えていた。蘭はどうして来なかったんだろうと。いつもの蘭なら、真つ先に、明るい顔を見せてくれるはずなのに…。

検査結果…何かあったのかな…。

と、頭の下で腕を組み立て、ぼんやり、考えていた…。

すると、扉が開き、現れた者は…。

“博士つ、灰原…ゲホゲホ…ゲホゲホ…”

“オイオイ、大丈夫かあ？ いや〜もつと早く来たかったんじやが〜哀くんに止められてのー”

咳が酷くなっているコナンに、灰原は驚きを隠せない。

“まあ、当たり前ね〜あなた、何かと博士を頼っていたし、病院を抜け出す手立てでも、考えそうな勢いだったから。”

“で、具合はどうなんじゃ？ 検査結果でたんじやる？”

“ああ、たいしたこゲホ…となかったってよつゲホ…ゲホ。咳も、扁桃腺の腫れが長引いてるだけ…ゲホ…ゲホゲホ…だってさ”

二人はすぐに、嘘だと気づいた…。そんなはずない。だったら、何で悪化してるんだらう。

その事に、工藤君は気づいてないんだらうか？ 哀の心配をよそに…

コナンは尚も、追い討ちをかける。

“なあ、灰原っゲホ…退院、いつか、聞いて来てくれねーか…ゲホゲホ…”

“やめて！…もう、喋るのやめて！大人しくしてなさいっ！！”

哀の、叫びに一瞬びっくりしたが、すぐに哀への疑問をぶつけた。

“何かあったのか？やっぱり…ゲホ…ゴホツ…検査結果…はあ、はあ…何か、言われたんじゃないのか…ゴホツ…？”

やっぱり、コナンはきづいてた。それを確かめるために…。私を試したんだ。

教えてくれと、言わんばかり…工藤君は、私の顔を覗き込んでる。

私も、実際検査結果は聞いてはいないから、はっきりした事は言えないけど、ただ、咳が尋常ではない事だけは言える。

随分、長く話していたせいか、コナンはまた発作を起こした。先生が来るまで、博士が背中を賢明にさすってあげていた…。

本当は、検査結果を聞きに行きたい。でも、その勇気がでない。だって、そうでしょ。工藤君、こんなに苦しんでいるのよ。今更、聞いたって、結果は見えてるわ…。

どうすれば、いいのよ。

私は、こんな時に何もできない。

ただ、毒薬を作っていたただのバカよ…。

何が科学者よ…。

## 泣かないで

少年探偵団は帰り道、とてつもない絶望感でいっぱいだった。まさか、コナンが…。死んでしまうなんて…。

コナンの発作を目の辺りにした、探偵団達。本当にやばいのだと、確信した。

“コナンくん…本当に死んじゃうのかな。”

“さっきの話だと、そんな感じですね…”

”んー、探偵団の仲間が困ってるんだ、元気付けてやろうぜ”

元太の言葉にシユンとなっていた2人は一瞬にして、笑顔になった。

“あらー、みんなー”

“蘭おねーさん”

ばったりとあつた探偵団達。コナン君の病院へ行って来たんだと知ると…。

“コナン君、大丈夫だった?”

と、聞いてはみたものの、探偵団達の口からは、発作の一言…。

瞬時に暗くなる。そして、小五郎から聞いた話を伝えた。

“私達、さっき聞いたの。コナンくん、死んじゃうかもしれないって”

そう、話す探偵団達を見ながら、蘭は両手で口を仰い、泣き出してしまった。

それを見た探偵団からの、口から思いもよらぬ事を聞かされた。

“ 私達、もし…コナンくんが死んじやっても、笑ってることにしたの。だって、一番辛いのはコナンくんだもん。”

“ そうですよ。僕たちまで、悲しい顔していたら、コナンくんに逆に心配されてしまうかもしれませんし…”

“ だよな。俺たちが明るくいれば、コナンだって元気になってくれるかもしれねーしな”

探偵団の言葉に、

驚きを隠せない蘭。

その時、忘れていていた事を探偵団達に教えてもらった。

そっだ。一番辛いのは、私達じゃない。コナンくんなんだ。私が泣いていたら、コナンくんも、悲しんじゃう。明るくいなきやダメなんだ。

“ それに、コナンくん、蘭おねーさんのこと、大好きだから、蘭おねーさんの笑顔見せに行つてあげて”

“ きつと喜ぶぜ、あいつ…”

“ ですよね…”

そう、話す3人に笑顔で答える。

“ うん。わかった。明日会いにいつてくるね。ありがとう、みんな…。”

蘭は、自分が情けなくて、情けなくて…コナンに会うのを逃げていたことに、悔しさに溢れていた…。

コナンくんが待っている…明日、会いに行つてあげよう。

子供達から教わつた、大事なことに忘れていた自分に…。また、涙が溢れてきた…。

そして…。そばで哀が聞いていたのを知らずに…。

## 真実

蘭と、探偵団の話を聞いてしまった哀は、本当の検査結果を聞きに行こうとした探偵事務所から、向きを変え、阿笠邸に戻る事にした。まさか、そんなに深刻な事なんて…。

コナンは薄々、扁桃腺の腫れではない事に気づいてる様子だったが、コナンの発作が起こってしまい、それ以上は聞けなかった。

阿笠邸の門を開けると、博士に先ほどの事を、言おうかどうか、迷っていた。でも、哀の小さな心では留める事ができなかった。

“博士……………”

“おお、哀くん。”

哀の姿に気づいた博士は、哀の帰りを歓迎してくれた。そんな博士を見ると、哀は一瞬、微笑んだ。

そして……………。

“博士…工藤君の様子は？”

“ああ、新一くんなら大丈夫じゃ。あの発作の後落ち着いた様じゃったから、後は毛利くんに任せて、帰ってきたんじゃ…”

“そう…”

哀の様子から何かあったのだと、確信した博士は、心配した様子で尋ねた。



“どうかしたのか？”

哀は博士の目を見ると…話し始めた。

“博士…実はね。さっき、蘭さんとあの子達の話聞いてしまったのだけど…工藤君、大変な病氣らしいの。多分…助からないかもしれない…”

“何じゃと？”

はかせの驚きの声と共に、あゆみの言葉が蘇る。

(コナン君が死んじゃっても…)

工藤君…。あなたはそんな簡単に死んだりしない。さっきまで、そう、思っていたのに。  
残酷な真実を聞いてしまった。

あの子を待たせたまま、江戸川コナンのままで死んでしまうの？

まだ、工藤君には明かされていないこの真実は…あまりにも残酷すぎる。

そんな想いとともに、哀と博士の間に、長い沈黙が流れた。

## コナンの異変

“明日こそ、本当の事、聞いて来るわ”

長い沈黙の後、哀は博士にそう、告げたあと、地下室へ消えてしまった。

その頃、病院では――。

“ケホケホツ…ケホケホツ…ケホツ…はあ、はあ。”

さほど、苦しい様子ではないものの、話してもいないのに、咳が止まらないコナンを心配して、先生を呼んだ小五郎。

“さっきから、ずっとこんな感じでー”

“うーん。コナンくん、ちょっと口開けられるかなー？”

先生はコナンの酸素マスクを外し、コナンの喉を診察して見る。見ると、喉の奥に何か引っかかっているのがみえ、うがいして取る事にした。

数分後、先生はボールとうがい薬を持って戻ってきた。

“コナンくん、起きられるかな？”

そう、言つと、コナンの身体を支えながら、起こし、うがいをさせた。

“ゲホツ、ガハツツ…”

ちよつと、うがい薬を口に含んだだけなのに、コナンは耐えられず、勢いよく、ボールに戻した。

数回繰り返したあと、主治医はコナンの喉を見ると、取れた様子だったので、コナンを寝かせ、再度酸素マスクをつけた。

その後、コナンの咳が落ち着いた様子を見て、医師は、また咳が酷くなった時のために、薬を小五郎に渡し、病室を後にした。

しばらく、コナンの様子を見ていた小五郎は、咳が落ち着いた事を確認すると、コナンにナースコールを持たせた。

“コナン、何かあったら…これ押すんだぞ、いいな？”

返事はなかったけど、コナンの咳が落ち着いたのを見て、大丈夫だと思ひ、帰る事にした。

## 蘭の決意

小五郎が帰宅すると、事務所で蘭が泣いていた…。

“蘭…？”

“お父さん！”

小五郎の帰宅に慌てて涙を拭くと、明るい笑顔を見せた。

娘が誰よりもコナンの事を心配しているのは、よくわかっているつもりだったが、コナンの前で明るくいる自信のない蘭を見ると、とてもじゃないが、コナンに会いにいけと言うことはできなかった。

“お父さん…コナンくん、また発作起こしたんだって？子供達から聞いたの…そういう時に、あの子のそばについてあげられないなんてね…”

“蘭…あまり自分を責めるな。それよりも、早くお前の明るい顔をコナンに見せに行つてやれよ…”

“うん…そうだね…”

その時、蘭は子供達の言葉を思い出した。

いつまでも、ないてなんか、いられない…。コナンを1人にしちゃいけない。

“お父さん…明日学校行く前に会つて来る。コナンくん、きつと待ってる。行つてあげなきゃ、可哀想だもんね。”

“大丈夫か？”

“うん…大丈夫”

父まで心配させている…。そんな自分が情けなくて…蘭は会いにくい事を決めた。それに、会いに行かなかつたら、コナンに病気の事を知られてしまう。

“明日、早めに出るから、朝ごはん冷蔵庫に作っていれておくから、チンして食べてね。それじゃ～おやすみなさい”

“おう。”

そう、挨拶して、自室に戻った。

(コナンくんだって、発作を起こしても頑張ってるだもん。元気な私がこんなに落ち込んでどうするのよ。しっかりするのよ、蘭。)

そう、言い聞かせながら、眠りについた。

—翌朝—

“行ってきます”

といい、探偵事務所をでるとそこには、蘭を待っていた人物がいた。

## 哀の疑惑の行方

“哀ちゃん…おはよう。どうしたの？こんなに朝早くから？”

哀は蘭の明るい顔を確認すると…。

“聞いてもいいかしら？江戸川くんの、検査結果…。”

“……………”

黙ってしまった蘭を見て、やっぱり、夕べの話は本当なのかもしれない…と、嫌な予感がよぎる。

“哀ちゃん…実はコナンくんはね、…”

“もしかして、あまり、長くはないの？”

衝撃が走った…哀からそう言われ、何も言えず、無言で頷くしかない蘭…。

“これから、病院に行くの。哀ちゃんも一緒に行く？”

“ええ。”

とりあえず、コナンくんの様子を見てみない事には、何も言えない。そう、思った蘭は哀と一緒にコナンが入院している病院に向かった。

病院に着くと、コナンの病室がなにやら、騒がしい事に気づき、2人は急いで病室に駆け寄った。

“コナンくん、わかるかい？コナンくん！！”

医者が、大きな声を出して、コナンに呼びかける声が聞こえたと思うと、コナンがストレッチャーに乗せられ、病室から出て来るところだった。

“コナンくん……！”

そう、叫ぶと蘭に気付いた医者から、緊急手術をする事を告げられ、そのまま2人は、手術室まで追いかけて行った。

## 九死に一生

コナンが手術室に入ってから、30分後…。

赤いランプが消えたと同時に、人工呼吸器を付けられたコナンがストレッチャーに乗せられ、出てきた。

“いや、危なかったけど何とか無事に、命はとりとめました。”

そう、いいながら安心している先生の話を聞く、蘭と哀。

実は、ナースコールを取ろうとして、ベッドから落ちたらしい。その弾みで酸素マスクが外れ、呼吸困難が起きた。発見が早かったため、大事に至らなかったが、もう少しで危ないところだった様だ。

”心配しなくても大丈夫ですよ、。ですが、酸素レベルが低下しますので、集中治療室で様子を見ましょう。”

先生の話聞いて、やっと安心できた。

コナンが目覚めますまで、側に着いてあげたいと、願いをする蘭を見て、先生は快く了承した。

蘭は白衣を着て、コナンの眠る集中治療室へ入って行った。

哀は、ガラス越しに、暫く眺めていたが、なかなか目を覚まさないコナンをみて、また夕方来ようと、帰って行った。



一方、集中治療室へ入って行った蘭は、コナンの手をギュッと握りしめ、心配な眼差しでコナンを見つめていた。

暫く見ていた蘭だったが、夕べ考え事をしていて眠不足だった蘭は、何時の間にか、コナンの手を握ったまま、眠ってしまった。

コナンの手が一瞬動いたと同時に、蘭は目を覚まし、コナンの顔を覗いた。

“コナンくん…よかった。気がついて……。”

“あっ…あ……。”

人工呼吸器を付けられたコナンはうまく喋れない。

それに気付いた医者が、コナンに声をかけながら、人工呼吸器を外し酸素マスクに変えてくれた。

“もう、大丈夫だからね、コナンくん。今度は気をつけるんだよ”

と声をかけると、夕方には病室に戻れますよと、蘭に教えてくれた。蘭はそれを聞くと、一安心したのか、笑顔でコナンの顔を覗き込む。

“蘭ね〜ちゃん、ケホツ…ごめんなさい。”

謝るコナンに、蘭の胸が痛む。

“いいのよ。謝らなくて…悪いのは私。コナンくんが大変な時に、付いていてあげられなかったんだもん。ごめんね、もう大丈夫だから”

らね…”

蘭の言葉に、コナンは笑顔を返す。

“これからは、気をつけようね”

“はい。”

と、念を押すと…コナンは素直に返事をした。

## 二つの学校で

もう、安心だと言う医師の言葉を信じ、蘭は学校へ行く事にした。

“行つてら…ケホケホツ…”

咳き込むコナンに、頭をさすりながら行つてきます。といい、学校へ向かった。

一方、帝丹小学校では…。

哀が遅刻してきたのは、コナンが関係してると思った三人は哀に何があつたのか？尋ねた。

“違つわよ。ただの用事よ…”

“でも、哀ちゃん…”

余計に心配が募る、探偵団。哀はそれを見て、はあー。とため息つき…。

“江戸川君なら平気よ。心配する事ないわ。だから…安心しなさい。”

そついう、哀にまだ納得の行かない三人だったが、頷くしかなかった。

その頃、帝丹高校でもコナンの事を心配している者がいた。

“ねえ、蘭…ガキンチョの具合い、そんなに悪いの？”

“うん…床に落ちた物、拾えないくらい体力落ちてて…今日もそれで、緊急手術したのよ。”

“もしかして…もう、やばいの？”

そう、話す親友に…恐る恐る聞く園子の耳にはとんでもない現実が突きつけられた。

”あと、2ヶ月生きられるかどうか…なんだって。本当なら…抗がん剤の治療で治す事も出来るけど、コナンくん…まだ子供でしょ。

それに、体力も落ちててそれはできないって…”

“にっ、二ヶ月うう？”

大声を上げた園子に、クラスの視線が集まる…。

“蘭…”

園子は、それ以上は何も聞けなかった。

## もつと、食べて

夕方、小五郎が病室に行くと、コナンの姿がなくもぬけの殻だった…。

“ なっ…ど、どこ行ったんだ？ ”

その時、ガラガラと言う音と共に、集中治療室からコナンがストレツチャーに乗せられ、病室に戻ってきた。

“ コナンっ！ ”

朝の出来事を医師から聞いて驚いたが、心配ない様子だったので、一安心した。

“ お嬢さんから、聞いてなかったんですか？ ”

“ ええ、まあ… ”

まあ、昨日の蘭の様子じゃ、伝える事まで気が回らなかったのだから。

術後による、発熱だそうで、風邪薬を渡された…。

“ 夕食の後に、飲ませてあげてください ”

そういうと、医師達はお大事にと、言い残し、病室を出て行った。

“ お父さん…”

入れ違いに、蘭が園子を連れてやってきた。  
今朝の手術の事を言い忘れた蘭はハツとし、小五郎に、今朝の様子を詳しく説明した。

“だから…私達が帰った後、集中治療室に移動して様子を見るそうよ。また、今朝みたいな事があつたら…危ないから”

“そうか…まあ、無事でよかつたなあ”

“本当”

コナンの顔を覗き込むと、眉間にシワを寄せて眠っている。風邪で辛そうだ。園子は、改めて事の重大さを確信する。

いつも、生意気ばかり言ってるがんきんちよが、弱々しくそこに眠っている…。それも、もう…長くないなんて。

また、生意気な口を聞いてくれる日は、あるのだろうか？……と。

そうこうしているうちに、哀と一緒に探偵団も、やってきた。  
園子を見るなり、元太は声を上げる。

“あつ、茶髪のね〜ちゃんだ〜”

“こら、だーれが、茶髪のね〜ちゃんだ〜？”

“ほら、あんまりうるさくするな〜”

と、小五郎に言われて、2人は、すいませんと謝る。

そして、夕飯が運ばれてきた。風邪薬を飲ませないといけないため、無理やりコナンを起こし、まだ、ぼーっとしているコナンに、蘭はスプーンを向ける。

“え、いいよー”

“いいから、食べて〜”

“何、いっちょまえに、恥ずかしがってるんだ？さっさと食べっ！”

と、恥ずかしがってるコナンを小五郎が一喝する。仕方なく、食べ始めた。

ほんの、5粒程度しか食べさせてないのに咽せるコナン。多いよと、言うコナンにもう少し少なめにすくい、食べさせていた。

やっと、1/3食べさせた所で、もういらなと言うコナン。小五郎や蘭がもう少しと、促し、ちよつとずつ食べるが、結局半分も食べられなかった。

“あんまり、お腹すいてないんだよー”

と言うコナン。どうにか薬を飲ませ、再度寝かせた。

その後、看護師がやってきて、ご飯の食べ具合をみて心配していたが、薬を飲んだ事で、安堵していた。

そして、コナンの中指にはパルスオキシメーターがはめられた。これは、酸素を図るもので、95以上ないとマスクが必要になるのである。

最初、痛くて気にしていた様子だったが、蘭にとつちやダメよと言われ、諦めそのうち、薬が効いてきたのか、寝てしまった。

## 疑問が募る

目が覚めると、そこは集中治療室だった。コナンが寝てる間に、それぞれ帰り、いつの間にか移動されていた。

看護婦が、コナンに気づき、おデコに手を当てながら、言う。

“うーん。熱下がってるみたいね。よかったね、コナンくん”

そういうと、ガラスの方を指差した。

“お友達が心配しているわよ。”

と言われ、ガラスの方を見ると、そこには哀がいた。

“灰原っ”

そういい、起き上がろうとするコナンを看護婦が制止する。

“何かあったら、呼んでね”

といい、哀を中にいれ2人だけにして、看護婦は部屋を出て行った。

“全く、バカなんだから…ナースコールを取ろうとして、ベットから落ちるなんて…それで、どう？調子は…？”

“熱も下がったし、平気だよ”

散々バカにした拳句、心配する哀をみて、文句の一つでも言ってるうとして、起き上がろうとするコナン。もう、自分の力では起き



上がれないのは知ってか知らずか、哀はそれを黙って見てた。

“無理しないで、寝てなさい。今朝みたいなドジ、されても困るか  
ら。”

“ドジって…”

“ドジじゃなくて、何だっけ言うの？それに…”

いいながら、哀はある事に気付いた。

“工藤君、咳は？”

“あつ、そういえば…出てねえー”

“よかつたんじゃない？治ってるって事みたいだし…まあ、油断し  
ない事ね…これ以上悪くならない為にもね！”

そういい、帰ろうとする哀を止め、疑問に思っている事を聞いた。

“なあ、教えてくれ…俺、何の病気なんだ？おかしいじゃねーか、  
検査結果は何でもね…って言われたのに、こんなに苦しんだぜ？本  
当は、何か…？”

“私も知らないわ…まだ、何も聞かされてないのよ…まあ、もし何  
かあるなら、そのうち言われると思うから待ってる事ね…”

そう言い残すと、看護婦に伝え、帰ってしまった。

灰原は、何か知ってるじゃないか？

何で教えてくれないのか？

もしかしたら、本当に何かの病気なのか？

灰原が口を硬くした事で、本当にやばいのかもしれないと、確信す  
るコナンは灰原はもしかしたら、誰かに何かを聞いてるのかもしれ

ない。そう、思っていた。

そう、哀は皆が帰る前に、蘭にコナンの本当の病気の事を確かめていたのだった。

## 突きつけられた現実

“ 蘭さん ”

哀は…今日こそ、聞かなくてはと思い、皆が帰ったあと、蘭を呼び止めた。

“ 哀ちゃん…どうしたの？ ”

“ 江戸川君のことだけど… ”

一瞬、ドキツとする。こんなに、思い詰めてる蘭に聞くのもどうかと思っただが、どうしても…哀は知っておかなきゃならないと思っただ。

“ 江戸川君の検査結果の事、くわしく教えてもらえないかしら？ ”

“ 哀ちゃん…。大丈夫？心の準備出来る？ ”

“ ええ… ”

その言葉で哀と蘭の間に、少しの沈黙が流れた。そして、蘭は大きな深呼吸を一つすると、哀の目をまっすぐみだ。

“ 結論からいうわね…コナンくん、急性喉頭蓋炎について凄く難しい病気なの。助かる確率は20%だつて…。本当は、手術で治せるらしんだけど…この所、咳や発作が続いてるでしょ？それに、体力だつて落ちてて…今の状態じゃ、手術は難しいんだつて ”

“ じゃ、江戸川君は…助からないってこと？ ”

“ 今の状態だと、多分… ”

哀の不安が、確信に変わったこの瞬間…あの子達の言葉が、胸に突き刺さる。

“死んじやっても…”

(やっぱり、間違いないんだ…)

どうして、こんな事になってしまったのかしら…。どうして、皆、いなくなってしまうの？このまま、一人でどうすればいいの？)

そんな事を考えてると、蘭が再度、口を開いた。

“哀ちゃん…コナンくんが助からないってわかってしまった今、私達にできる事あると思うの。最後まで、コナンくんの側にいてあげよ？皆で笑っていよう？悲しい顔見せたら、コナンくん、辛いから”

蘭にそう、お願いされて…頷いた。

(蘭さん、強いよね…)

コナンの看病をずっとして来たせいか、強くなってるのかもしいい…。

“で、蘭さん…。江戸川君、あとの位生きられるの？”

“もって…2ヶ月くらいだろうって…”

“……………！……………！”

半年って言葉を予想していた。そんな哀に告げられた予期せぬ事態。2カ月なんて…酷すぎる！どうして、そんなに早く…。

哀はいてもたってもいられず、蘭に帰ると告げて病室をでて、トイレに駆け込んだ。

“わああ〜あ〜〜ああ〜”

思ってもいない現実に哀はただ、泣くしかなかった。

集中治療室に移動された、ガラス越しに見えるコナンの顔を見ながら、哀はどつする事もできない自分の不甲斐無さを攻め続けた。

## 一年B組からのメッセージ

緊急手術をした次の日から、発作も酷い咳も少なくなったコナン。自分の疑惑は勘違いだったのかと、思い始めた。

診察する先生はにっこりして、コナンに話した…。

“うん。大分、調子も良くなってますね…腫れも、目立ちませんし…少しの散歩なら出て来てもいいですよ”

“本当ですかー？よかったね〜コナンくん”

“うん”

コナンより、蘭が一番喜んでしまう。今日は日曜日…小五郎や蘭、園子…それに、探偵団もお見舞いに来ていた。

ただ…哀はあの日以来一度も、来ていないのだ。

折角だからと、散歩に行く事になったコナン達。無理はしない様にと、マスクを装着させた。

コナンの車椅子を押す蘭を筆頭に、園子と探偵団が着いて行く…。小五郎は？俺はタバコ吸ってくる？と喫煙所に向かった。

中庭に出ると、日曜日だからか、沢山の患者達が散歩に来ていた。

コナンにとっては、久しぶりの外の空気。自然と笑顔が零れる。大きな木の木陰を見つけ、休む事にした。

そして、元太、光彦、あゆみがクラス皆からコナンへの励ましのメッセージ預かってきた。

“皆で書いたのよ”

と言いながら、あゆみがコナンに渡した。次々に読んでいくと、コナンくん頑張ってる？早く元気になってね？など書かれ、正直、嬉しかった。

初めは小学校なんて〜って思っていたが、こういうのも、たまにはいいか。なんて思ってしまう。

読み進めて、最後の一枚にはとてもお見舞いとは取りにくい、メッセージが書かれてあった。

“ちんたらやってたら、あなたのスケボー捨てるわよ??”

灰原なりの言葉が書いてあった。早く帰ってきなさいと言いたいのだろう。灰原のメッセージをみて、思い出したかの様にあゆみ達に聞いた。

“そついえば灰原は?”

“本当は、灰原さんも誘ったんですよ”

“でも、やる事があるからって言われてよ”

“断られちゃったの”

ふーんと、寂しそうにするコナンを見て、園子がちよっかい出す。

“何?ガキンチョ、寂しいの??”

“ち、違うよっ最近あいつ来ないから、どうしたのかなあーって思っただけだよ”

と、笑うコナンに蘭が言う。

“ あら？哀ちゃんなら、たまに来てるわよ？最も、病院内で見かけるだけけど…”

“ えっ???”

“ その様子だと、病室には来てない見たいね”

“ えっ、うーん”

灰原は、病院には来ているのに、コナンのいる病室に来ないで何やってるんだろっ？

コナンは灰原の様子がおかしい事にまた、つまんねーことに気づいてるんだろ？くらいに思っていた。

“ くしゅんっ”

コナンのくしゅみをきっかけに、風が出てきて、寒くなったので病室に戻る事にした。



## 自分との戦いー哀ー

(工藤君…。)

誰も通らない夜の集中治療室の廊下で…。

哀はガラス越しにコナンを見ている…。

誰にも気付かれないように…もちろん、コナンにも…。

あの日以来、コナンと顔合わせる事のできなくなってしまった哀。こうして、眠っているコナンをただ、見つめる事しかできない。

会っても、何を言えばいいのか分からない。

いつもの様な憎まれ口すら出てこない気がして…。

“ん……。”

“あ……”

コナンが目を冷めたと同時に、哀は集中治療室をあとにした。

この一週間、病室には来ては見るものの、入る勇気がなく、何度も何度も、病室の前まで来て帰ってしまう哀。

コナンの散歩が許された、あの日だって、中庭で談笑している様子を遠くの木に隠れて見ているしかできなかった。

哀は自分の心と戦っていた。蘭の様に強くなれない自分には、何もできない。見守る事しか出来ないのだと…。

ここんどこ、元氣のない哀を博士は心配しているが、返ってくる返

事はいつも一緒。

“なんでもないわ…。博士の気のせいよ”

こんな時、新一がいればなんとかしてくれたかもしれないのに…、  
当の新一は病院で残された命を懸命に生きている…。いつか、退院  
できると信じて。

博士に、コナンの検査結果を話した後から、急に一人で出かける事  
が多くなった哀…。

(これは、自分で解決するしかないのよ。誰にも頼ってはいけない。  
でも…どうしたらいいのよ…どうしたら…)

解決策も見当たらない、自分の気持ちを責め続けながら、哀は病院  
から帰る途中、さっきまで病院にいたはずの蘭に会った。

“哀ちゃんっ!”

無性に明るい蘭の声は自分の不甲斐無さを腹が立たせる。彼女はな  
ぜ、こんなに明るくいられるんだろう。自分はなぜ、こんなにも辛  
い気持ちになっっているんだろう。そんな気持ちを押し殺し、平静を  
装って蘭を見た。

“蘭さん、こんにちは。”

“こんにちは。どうしたの？最近コナンさんの病室に来てないみた  
いけど…?”

“えっ?ええ、まあ!。私もいろいろと忙しいから”

哀の表情がいつもと違うように思った蘭は、

コナンも哀が来ない事に心配事している旨を伝えた…。それでも、表情は変わらずだったから、哀の気持ちを聞き出す事にした。

## 初めて見せる涙

“哀ちゃん、何かあった？もし、哀ちゃんの中で…何か起こっているなら、話して欲しいな。ほらっ、人に話すと気持ちが悪くなるって言うでしょ？”

“……………。”

2人は近くにあったベンチに座り、話し始めた。どんな事でもいい、話して欲しい。この子の悲しそうな表情がいつも増して、辛そうだから…。私にできる事があるなら、助けてあげたい。

蘭は、コナンのお姉さん役として、面倒を見て来た事もある…：必要以上に心配になってしまふ。

“哀ちゃん、あの日依頼来てないよね？検査結果を伝えてから、コナンさんと会えないんじゃない？”

“……………！！！”

凶星を言われて、思い切り蘭の顔を見る。

蘭はやっぱりと言った表情を浮かべて、哀に諭すかの様に話始めた。

“コナンさんに会ったの、辛い？？検査結果聞いて会えなくなっちゃったんだよね？私もね、最初会えなかったんだ。コナンさんの顔見たらなんだか、泣いちゃうんじゃないかって思ったりして…でもね、あの子達に言われたのよ。”コナンさんの前で、笑顔でいる！一番辛いのはコナンさんだから”って…”

“あの子達が？”

哀は驚いた…あの子達がそんな事を言っていたなんて。あの日、途切れ途切れに聞こえた言葉は…蘭をも励ましていた事。そして…蘭の心にも突き刺さっていた。

“私ね、コナンさんの命が2カ月だって言われた時、辛かった…すごく辛かったんだ。でもね、本当に辛いのは、コナンさんなんだよね…今も病気で苦しんでる…治せない病に…だから、哀ちゃん！コナンさんと過ごせる時間はなるべく、会いに行つてあげて欲しいの。コナンくん、きっと喜ぶと思うよ？”

蘭の気持ちのこもった言葉に、打たれ涙が出てくる。蘭は驚いていたが、哀の言葉を待った。

“うっ…私、辛いよ。江戸川さんのあんな姿…もう、見たくないのよっ…うっっ…私の周りにいる人、皆いなくなってしまう…彼だつてそう…そんなの嫌なの。だったらいっそ、私の事は忘れればいいって…”

“哀ちゃん…ダメよっ。哀ちゃんが忘れてつて望んだとしても、コナンくんは忘れること出来ないと思うよ？だつて、折角出来た友達なのよ？そんな事言つたら、コナンくんはかわいそうじゃない…”

正直、今まで…こんなにも思いつめた哀を見たのは初めてだった。そこまで哀を苦しめている二か月という現実には、蘭は押し殺されそうだったが、今はこの子を守らなくてはという思いで、いっばいだつた。

## 哀の暗闇からの脱出

“哀ちゃん、これから病院へ行こう？”

蘭の突然の提案に、哀は戸惑っていた。こんな気持ちで会うなんて出来っこないじゃない…。でも、行かなきゃ自分の気持ちに決着がつけられない。

“私……。”

“大丈夫。普通にしてればいいのよ。もし、泣いちゃったとしても、コナンくんは笑って許してくれるはずよ？それよりも、来てくれたって事が一番大事なんだから、ねっ？”

蘭は哀の両手をとって、どうしても連れて行きたくて仕方ない様子だったので、泣く泣く、コナンの所に行く事にした。

(こんな顔じゃ、彼に、バカにされるわね…。)

二人して手をつなぎ、病院までの道を歩っている途中…ついこの前までは、コナンとこうして手をつなぎ、歩いていた事を思い出した。また、こうして手をつないで歩くこと、出来るんだらうか？

コナンの病室の側までくると、立ち止まってしまった哀。どうしても、ここから先へ進む事ができない…。

”どうしたの？哀ちゃん…さあ、行こう？”

“私…やっぱり……”

“ここまで来て、何言ってるのよ？大丈夫よ？”

その時だった。探偵団の三人が病室から飛び出して来た。哀に気づくと、次々と、明るい声をあげた。

“灰原さん！やっぱり来たんですね〜？”

“哀ちゃん！今日コナン君ね、車椅子で中庭まで散歩出来たんだよ”

“お前も行くこうぜ…ほらほらっ”

ほぼ強引な探偵団達に引つ張られ、病室へと入って行く。入ると、元氣そうに大きなベッドにちょこんと座っているコナンがいた。

“久しぶりだな…全然来ねーから、何かあったのかと思ったぜ”

“人の事心配してる暇があったら、自分の事心配しなさい”

相変わらずの憎まれ口だったが、哀の元氣そうな言葉を耳にして、コナンは安心していた。

“お前に暗い顔なんで似合わないぜ…そういうセリフ聞かせに来いよ”

コナンは何で今まで哀が来なかったのかは引つかかっていたが、今はただ…哀が来てくれた事で、安心していた。

そんな二人の様子を見ていた、皆もホツとして笑顔になっていた。そして、哀も…コナンを見つめながら、不敵な笑みを浮かべていた。最近…眠っているコナンしか見ていなかった哀…こうして元氣なコナンを見るのは久しぶりだった。

## 拒絶反応

“よかったじゃない！コナンくん、回復してるみたいで…”  
“うん…だといんだけど…”

近頃のコナンの様子を見て、園子は安心した様子で蘭に話す。

“大丈夫だーって。蘭の話だと、もっとやばいのかと思ったけどさ  
あの様子なら退院近いんじゃない？”

“そうだよね…最近、発作もないし…大丈夫だよね…”  
“そうだよっ”

集中治療室の移動も解け、体力も戻しつつあるコナンを思い出し、園子の励ましに大丈夫と思い、園子にお礼をいい玄関口まで送り届けた。そして蘭は、コナンのいる病室へ戻っていった。

“うっ…ケホケホ…”

“どうしたの??”

“夕飯食べ終わった後、急に咽せ出したんだ…”

病室へ戻った蘭はコナンがボールを抱え、嘔吐してる姿をみて、驚いていた。

それを離れて見ていた哀に”外出てよ”と声かけ、連れ出した…。

“哀ちゃん、見るの辛いなら出てていいのよ?”

“ええー、でも…”

蘭はこの間の哀の言葉を思い出し、声をかけるが、哀は自分で言っ



た弱音から逃げたくないと思ってしまう。

(工藤君は、病気に侵されながらも賢明に戦っている…私が逃げてどうするのよ)

それに、嘔吐してる時に、病室から出て行けば、自分が原因だと思われてしまう…そんなの、嫌だった…。

病室に戻った哀は、コナンの姿をしっかりとみて、”頑張るのよ”と思っていた。

医者の話では…この間まで食欲が薄かったコナンの身体が、急な食欲増加によって身体が驚き、嘔吐してしまっただけで心配はないといわれた。

“ただ、これがきっかけに…コナンくんが食べる事を嫌がるのが心配ですね…”

食べると嘔吐の繰り返しに、また…点滴の栄養だけになる事もあるかもしれない。そしたら、また…自分で起き上がる事も出来なくなってしまう…。

そんな心配をよそに、毎日の様に繰り返される、嘔吐に…日に日にコナンはやつれて来ていた。

“大丈夫よ。コナンくん…いっぱい食べて、元気になろうね”

体力をつければ、嘔吐も無くなる…背中をさする度、震えるコナンの身体が悲鳴をあげてる事に、見舞いに来ている人達の心配も増して行った。



## 退院したくて

嘔吐を繰り返すあまり、食事の時間になるのが怖くなって行くコナン…。

“夕飯だよ、コナンくん”

看護婦さんが、夕食を持って入ってきた。それを受け取る蘭だったが、コナンの表情が曇っている事に感じていた。

“はい、コナンくん……”

“今日はいいよ……”

嘔吐を繰り返すあまり、弱音が零れる…。そんなコナンを励ますかの様に、食事を促す。

“ダメよ、食べなきゃ…元気になれないわよ”

“おなか空いてないんだ…”

わかっていた…嘔吐があまりにも苦しくて、食べる事を拒み始めた事を…。それでも、どうにか食べてもらわなければと、蘭は拒み続けたコナンの口元にスプーンを持っていく。

どうにか食べてくれたものの、数分で嘔吐が始まった。

“うっ…ゲホゲホツ…うっっ”

どうしてあげる事も出来ず、ただ、ふるえるコナンの背中をさすりながら、蘭は泣き出しそうになる自分を必死に止めていた。

“コナンくん、食事はちゃんと取るうね！次期に体力も回復すれば、一次退院できるからね”

様子を見に来た励ましとも取れる先生の言葉が、コナンを少しだけ勇気付けた。

静まり返った、誰もいない深夜の病室でコナンは…歩く練習をしていた。起き上がる事はできるが、まだ自分のチカラで歩く事は出来ないでいた。

”ハアハア、ハアハア…。”

やっとの思いで、ベッドを降りたコナン…。

膝を曲げ、ベッドに両腕を置いて立とうとするが…思っ様に立てない。そのうち、バランスを崩して転んでしまった。

こんなにも、体力も息も上がってしまう自分の身体に腹が立ち、悔しさが募る…。

丁度通りかかったのか、その音に気づいて巡回していた看護婦が入って来た。

“コナンくん…何してるの？”

“トイレに行こうと思って…”

“トイレはいいの、これがあるでしょ？”

ベッドの脇に下がっている管を指差す。コナンは足に力が入らず、一人で歩けない為、トイレにいつてする事が出来ない。

”でも、ぼく退院したいんだ…”

“コナンくん、焦っても退院出来ないよ？しっかり食べて、体力つけなきゃね”

その言葉に頷き、再びベッドに寝かせられた。

“お休み、コナンくん”と言うと、看護婦さんは出て行った。

## 待ちに待った退院の日

その後も、嘔吐しながらも頑張って食べたせいか、体力がどんどん回復して行った。

次第に少しずつではあるが、歩ける様になって行った。

そして、ついに先生から一次退院が許された。

丁度皆集まっていた時の報告で、嬉しさのあまり、自然と笑顔が零れる…。

退院は金曜日から3日間。その際に、喉の薬と発作が起きた時の薬2錠が渡された。何かあった時の為に、小型酸素ボンベを渡された。

そして退院当日…。無理はしない様にと念を押され、蘭に連れられ、小五郎の運転するレンタカーに乗り込み、久しぶりの探偵事務所に向かった…。

まだ、しっかり歩けないコナンは蘭におんぶされて3階の自宅に連れられた。

“よかったね、コナンくん。でも、油断はしちゃダメよ？”

“うん、分かった”

“じゃ、ちょっと待っててね、ご飯作ってくるから…。”

そう言うと、コナンを背もたれ椅子に座らせて、夕飯を作りに行った。



大阪からあいつらが…

“ よう、元気かあ?? ”

登場したその2人は、蘭がいる台所に顔を出した。

“ 服部君に、和葉ちゃん ”

“ 久しぶり〜蘭ちゃん ”

” どうしたの？急に〜? ” と言う蘭の言葉に、ここんとこ、何度電話しても出ない電話を心配して、やってきたのだと言う。

“ ところで、坊主は? ”

“ えっ? コナンくんならそこに… ”

“ おらへんで? ”

コナンがいない事に驚き、慌てる蘭に事情の知らない2人は不思議そうに見ている。

“ そんな心配せえへんでも、大丈夫なんとちゃんか? ”

“ トイレでもいったんちゃう? ”

と言う2人にそんなはずはないのと否定して、事情は後で話すから、探すのを手伝ってもらおう事にした。

家中どこ探しても見当たらない…まさか、外に出たんじゃ? と不安になる蘭は、外を探す事にした。

“ もしかして、博士の…? ”



すぐさま、博士の家に向う蘭…その時、丁度倒れこむ、コナンの姿を発見した。

“コナンくん!!”

壁伝いに立っていたコナンは力尽きて、地面に手を置いて、荒い息を吐いていた。

“何やってるのよ？また、こんな危ない事をして…”

蘭と一緒に探してた平次と和葉は蘭の姿を発見して、側に近寄る。

“よかったなー見つかった〜”

和葉の言葉に安堵した蘭は、“行こう？”とコナンを連れて帰ろうとする。その時、コナンは思いがけない言葉を口にする。

“もう、いいよ蘭ねーちゃん…：ぼく、もう生きられないんでしょ？”

知っていた？そんな事はない。だってだれも言うはずないんだから…じゃあ、どうして？

そんなコナンを見つめ、蘭が否定を込めて、コナンに話し始める。

“何言ってるのよ…：そんなはずないじゃない！だんだん良くなって  
るって、お医者さんにも言われたでしょ？だから、コナンくんは何  
も心配する事ないのよ？”

そんな会話を聞いていた2人は、風邪かなんかで弱気になってるん

だろう？ぐらいにしか思わなかった。

“でも…ハアハア…おかしいよ！それなら何でこんなに…ハア…苦しいの？本当の事教えてよ、蘭ねーちゃん…ハアハア…”

コナンの”苦しい”の言葉に蘭は涙を零すと、コナンの身体を抱きしめた。

“大丈夫…大丈夫だから。”

コナンを諭す様に抱きしめる蘭だが、コナンの口から出た言葉は、あまりにも酷だった。

“ぼく、病院戻ったら…ハアハア…死ぬしかないんでしょ？ハアハア…だったらもう一度、新一兄ちゃんのお家、行きたかったんだ…”

そう話すコナンに蘭の涙が零れてく…。

“死なない、死なないよ。コナンくんは死なないから、だから…そんな事、言わないで…”

“蘭ね……”

そこで、コナンは意識を失った…。急いで蘭は探偵事務所に戻り、布団に寝かせた。

意識を失ったのは、無理をして歩いたせいだったから、栄養剤を飲ませ寝かせる事にした。

## 躊躇するコナン

“ん……？”

目を覚ますと、そこは布団の中だった。やっぱり倒れてしまったんだと、絶望感でいっぱいだった。

“よう、やっと目え覚ましたか？”

“服部？”

蘭と小五郎から事情を聞いた、平次と和葉。信じられない様な現実  
に2人はシヨックを受けたが、蘭や小五郎に”コナンには黙ってて  
欲しい”、”いつも通りに接してもらいたい”という、2人の気持ち  
を理解し目が覚めたコナンを心配してやってきた。

“大丈夫かあ？”

“どうして、ここに？”

“ちつとも電話に出んへんし、何かあったと思って心配してきたっ  
たんや”

事情は聞いたという、平次の言葉に一瞬曇ったが”夕飯にしようか？”  
と平次の言葉に促され食卓に向かった。

テーブルには既に、人数分の食事が用意されていた。

コナンを座椅子に座らせると、皆一斉に食べ始めた。蘭に渡された、  
お粥の入ったお茶碗とスプーンを持つ手が止まる…。

また、これを食べたら嘔吐が始まる事にコナンには恐怖が待ってい

た。” 食べなきゃダメ？” と言うコナンに蘭は心を痛めつつも、  
頑張りつつ”と促したそれでも食べようとするコナン。

“じゃあ、ぼく後で食べるよ。皆の食事の邪魔しちゃ悪いしよ……”

といい、側にある嘔吐用のボールに目をやるコナン。自分の病気の  
せいで…皆に迷惑かけてる事にいた堪れない様子のコナンに対して  
和葉と服部は一斉に口を開く。

“嘔吐の事なら、聞いてるで〜！”

“えっ？”

“そんなん気にせんで、はよ、食べ！せやないと、元気になるへ  
んやないか？”

2人の言葉に安堵した様子だったが、やっぱり躊躇してしまうコナ  
ン。それをみて、小五郎が”しょうがねーな”といい、コナンの手  
からお粥を奪うと無理やり口を開かせ、押し込んだ。

“！！！！……おじさあんっ……”

涙ながらに訴えるコナンをみて、蘭達から非難の声が上がる。

“おっちゃん、何やってんの？”

“やめときて……”

“お父さん！コナンくん、かわいそうじゃない”

“うるせーな！！こうでもしないと食わねーんだよっ”

口を抑えるコナンは、苦しそくに嘔吐し始める…。

“うっっ…ゲホゲホゲホッ……”

“大丈夫？コナンくん…もう、お父さん！”

震えながら、嘔吐するコナンの背中をさする蘭は、小五郎の無理な行動を責めた。

嘔吐しながらもどうにか、食べ終わったコナンはあまりにも疲れ果てていた…。

“そうだ、明日どこかドライブしに行かない？”

“ドライブ？”

“ほら、コナンくん…折角退院したんだし、家にいても、つまんないよどこか行った方がいいと思って…ね、コナンくん、どこ行きたい？”

蘭の提案に一同は驚いていたが、コナンが元気になればと思うと、賛成せざるを得なかった。

“うーん、じゃ…海とかかな？”

“海？いいじゃない！行こう、海。お父さん、レンタカーよろしくね”

半ば強引に蘭に促された感じだったが、明日早速行く事になった。

## 思い出の海

お風呂に入って、小五郎の部屋でくつろいでいると、蘭が入ってきた。

“ごめん、服部君：今回は和葉ちゃんと私の部屋で寝てくれる??”

“なんでや?”

“ほら、コナンくん、夜中に何かあったら困るでしょ??”

“大丈夫やって：俺らが付いてるさかい”

突然の提案に戸惑う服部は拒否をしていたが、蘭の押しに負け結局、和葉と蘭の部屋に寝る事になった。

“たくつ、なんでお前と寝ななあかんねん?”

“ええやん、修学旅行みたいでおもろいやん”

“おい、和葉、襲うなや”

“そら、こつちのセリフや”

口喧嘩をしながらも、仕方なく寝るふたり：夜中に小五郎の部屋から聞こえてくる咳に心配にもなりつつ、朝を迎えた。

“ごめんね、服部君：良く眠れた??”

“こいつのイビキがうるそーて、寝れんかったわ”

“私はイビキなんてかかへん”

冗談を言う、服部に和葉の反感を買ってしまう。けど服部はコナンの事が気になって、眠れなかったのは、事実だった。

“おーい、レンタカー借りてきたぞー”

朝食を済ませ、忘れ物はないか確認をしていると、ププーという音と同時に小五郎がレンタカーで現れた。

コナンにマスクを付けて、あつたかい格好をさせるが“暑いよ”という、コナンの口から出るわがままに、なんだか愛らしさを感じていた。

車椅子を積み、コナンを抱えて乗り込む蘭。運転する小五郎を筆頭に、海へ向けて出発した。

窓を開けると、涼しい風が入ってくる。コナンは目を瞑り風を感じていた。

“コナンくん、寒くない??”

と、心配する蘭をよそにコナンは風が気持ち良くてたまらなかった。そんなコナンを見ると、病気なんて起きてない様な感覚を覚えてしまうのはなぜだろう。

“けど、大丈夫かあ??病院から、かなり遠くなってるぞ?”

“一番近い海、そこしかないのよ”でも、大丈夫よ。ちゃんと薬持ってきたから”

塩の匂いと共に、だんだんと海が近づいてきた。ようやく海に到着し、コナンを車椅子に乗せ、海際まで行って見る。

“コナンくん、着いたよ海……”

“うん……”

砂浜に目をやると…元太達の顔が脳裏に浮かぶ……。

あいつらと、潮干狩りや海にキャンプ…良く行ってたのに…もう、行けないのかな??

いつも、前向きに考えていた気持ちが一変して卑屈になってゆく…。

でも、この海の潮の匂いを肌で感じられるこの瞬間だけは、生きてると思えるのだった。



## コナンの想い

その後、小五郎と服部達と別れ、蘭はコナンの車椅子を押しながら、海辺に沿って歩いていた…。

優しい風が吹きつける中で、蘭の髪がゆっくり揺れる。

“気持ちいいね、コナンくん…”

“うん…そうだね…蘭ねーちゃん…ありがとう”

“えっ？どうしたの??”

“ううん、何でもない”

自分の事を今までずっと看病してくれた蘭に、どうしても言っておきたかった言葉…いつ死んでしまうかわからないこの身体をずっと、抱きしめ守ってくれた。

きつと、コナンが死んでしまう直前まで側から離れず、守ってくれるだろう。

病気になるまでもずっと、弟の様に面倒を見てくれた蘭。それまでも、幾度となく見守ってくれた。

病気になってからは、辛いのを押し殺して…コナンから目を離す事なく側にいてくれた蘭に…。

きつと、これからも迷惑を掛けてしまっだろう。本当は…命がけで守り抜いてあげたかった蘭に、俺は何をしてあげれるんだろう？

限りなく限界に近いこの身体…残された命で蘭にしてあげれること

…。きつと、それは…一日でも長く蘭の側にいて、生きることなんだ…。

コナンはわかっていた。蘭が来なかったあの日から…皆の様子が変わって行ったこと…。

見舞いに来る人のコナンを見る目がいつもと違って寂しそうになっ  
ていった事。

灰原が病室にこれなくなった事も…病気に蝕まれ始めた時から、  
大丈夫”と励まし続けてくれた蘭の事も…ずっと、わかっていた。

発作や嘔吐をした時だって、苦しそうな俺を見る度、泣きそうにな  
る蘭や心配する眼差しで見る皆の様子で、ただの扁桃腺ではない事  
に気づいていたが、どうしても…聞く勇気がなかった。

俺は、あとの位生きられるんだろう。咳ひとつしただけで、心配  
する蘭。発作なんて起きたりしたら、また蘭に心配させてしまう。

いつかのレストランで言えなかったあの気持ちをせめて、本当の自  
分の声で伝えてあげたかった…。

遺される者への、申し訳なさとお甲斐なさ、そして…一番大事な蘭  
への思いが気持ち揺き乱し、コナンは遺された命を精一杯生きる  
事を決意した。

## コナンの告白

“コナンくん…大丈夫？寒くない??”

“うん、大丈夫だよ。蘭ねーちゃん……。”

冷たい風が2人の身体を吹き付ける。暖かい服を着ていても、容赦なく寒さはコナンの身体を冷やしていく。

震えるコナンの背中を蘭は自分のコートを掛けて温める。

“大丈夫だよ…蘭ねーちゃんが寒いよ”

“いいのよ、コナンくん…私の事は心配しないで…”

蘭が掛けてくれたコートを握りしめ、温もりを感じつつ蘭の優しさが肌を温めていた…。

暫く歩いていると、突然コナンが車椅子を止めた。蘭は不思議な顔をして、コナンの背中を見る。

“どうしたの？コナンくん…”

“蘭ねーちゃん…ぼく、蘭ねーちゃんにいい事があるんだ…。”

そのか細い声は、海の波音に消されない様に、一生懸命に小さな口で話し始めた…。

“今まで…ぼくの看病をしてくれて、嬉しかったよ…。ずっとぼくの側にいてくれて、ありがとう…”

なぜか、突然お別れの様に言い出したコナン…胸が締め付けられる  
想いがした蘭。車椅子のストッパーを止め、コナンと向き合う。

“どうしたのよ、突然…?”

“お礼が言いたかったんだ…もう、言えないかもしれないから…”

その、ちいさな胸にはとても大きな覚悟をしている事に、蘭は感じ  
取っていた。

もう、何を言ってもごまかせないのかも知れない…病気の事、コナ  
ンくんは知ってしまったている。という、確信が胸を貫いた。

それでも、蘭はコナンに悟られない様に励まし続けた……。

“コナンくん…何弱気になってるのよ…コナンくん、今生きてるじ  
ゃない…”

そう言った蘭の瞳から大粒の涙がこぼれ始めた…。

“蘭ねーちゃん、ぼく…大丈夫だよ。最後まで頑張るからっ。だか  
ら…お願い蘭ねーちゃん、泣かないで…ずっと、笑っててよ…ぼく、  
蘭ねーちゃんの笑顔が一番好きだからさ”

コナンが発した言葉にこの子はこんなに苦しい病気と戦っていても、  
ずっと頑張り続けている事に気づかされる蘭。

“コナンくんっ…ごめんね、守ってあげられなくて…ごめんね”

そっいいながら、蘭はコナンに抱きついた。

まだ生きてるちいさな身体を…鼓動を感じ取り、この温もりをまだ、奪わないでと言う気持ちでコナンの身体を力強く抱き締めた。

“ぼく、蘭ねーちゃん達のお陰で、ここまで生きてこれたもん。だから、平気だよ…”

“コナンくん…。”

向かい合い、お互いに見つめ合う蘭とコナンは…暫く微笑みあっていた…。

この一瞬、一瞬を忘れない様に…まだ、思い出にはしたくない、このひとときを噛み締めて…。

## 想いでの写真

そんな2人の様子を遠くの浜辺からみていた小五郎、平次、和葉…。

苦しみながらも、残りの少ない命を精一杯生きようとしているコナンを前にすると、自分らがこうして生きている事に感謝せざるを得なかった。

“けど、よかったわ〜発作起こらなくてそれにコナンくん思ったよ、元気そうやしな〜”

蘭と向かい合って話すコナンを見つめながら、和葉が安堵した様子を話す。

“あの坊主、自分の病気の事感づいてるかも知れへんな〜”

“え〜？なんでー??”

“なんとなくや”

そんな会話をしていると、蘭がコナンの車椅子を押しながら、ゆっくりと帰ってきた。

そして、帰る前に写真を撮ろうという事になった。

コナンを中心に囲む4人。セルフタイマーが自動的に押され、フラッシュする。

皆が自然と笑顔になるこの時、こうして笑っているのが当たり前で、でも当たり前じゃなく、これが生きてるといふ事だといふ事にコナンの笑顔を見る度に気づかされるのだった…。

― 帰り道 ―

疲れてしまったのか、コナンは車の中でスヤスヤと寝入ってしまった。

少し距離のあった海に行くのは、心配もあったが…発作もなく、無事に帰る事が出来てよかったと、安心感さえ芽生えて来た。

コナンの気持ちよさそうに眠った顔を見て、安心したのか…そのままま蘭も一緒に眠っていた…。

その夜、皆が見守る中、嘔吐しながらも頑張って食べようとすろコナン。それを手伝うかの様に、背中をさする蘭。

そんな光景を見ていた平次と和葉にも、コナンの身体を蝕む病の大きさを身にしみて、感じるのだった…。

## 命をかけた発作

皆が寝静まった一次退院2日目の夜…。それは起こった…。

“ゲホツ、ゲホゲホゲホツ…”

なかなか咳が止まらないコナンを心配して、蘭がコナンの背中をさする…。

“らあん、ねー…ちゃ…ん…ゲホゲホゲホツ…”

苦しそうに胸を抑えながら、蘭の名前を呼ぶ…。

“苦しいの??薬飲む?”

そう言うと、蘭は台所から薬と水を持って来て、コナンに飲ませた。少しは楽になったものの、なかなか咳が止まらない。そればかりか、呼吸も乱し始めた…。

“コナンくん…”

心配しながら、背中をさすり続ける蘭…コナンの容体に驚いた小五郎は、救急車を呼ぼうとしていた…。

“おじさあん…大丈夫…ゲホツ…救急車呼ばないで…”

弱々しい、小さな声で訴えるコナンを見て、病院に行きたくないそう言ってる様に聞こえた。



“大丈夫だ、コナン…また戻ってこれるから”

そう言うと、小五郎は救急車を呼びにいった。

荒かったコナンの呼吸が一変して小さくなって…布団を握りしめていた手に力がなくなっていた。

“コナンくん？コナンくん、コナンくん！！”

コナンを力強く抱き締めながら、泣き叫ぶ蘭。その声を聞き、慌てて小五郎の部屋へやって来た、平次と和葉。

“どないしてん？”

“コナンくんが、コナンくんが！！”

コナンが息をしてないと思っていた蘭は、平次に助けを求めると、平次はコナンの脈を確かめた。

“大丈夫や、まだ生きてるで”

“よかった…”

救急車を呼び戻ってきた小五郎は、小型酸素ポンベを取りだしコナンの口に当てた。

“蘭、救急車が来るまでこれで空気を送っとけ…”

指示された通り説明する小五郎に頷き、意識がないコナンの口から、酸素ポンベで空気を送り込む。

“コナンくん、死なないで…”

そう、祈り続けながら救急車が来るまでの数分間、ひたすら空気を送り続けた。

## あれから一ヶ月

病院に着き、急いで救急治療室に運ばれたコナン…。

皆が心配して待っている中、救急治療室の扉が開いた……。

ガラガラガラ……という音と共に、ストレッチャーに乗ったコナンが出てきた。

病室に運ばれたコナン…鼻には酸素チューブを挿入され、腕には点滴、指にはパルスオキシメーターがはめられていた。

一通りの処置を終わらせた後、先生は、コナンを一人残して、皆を病室の外に促した。

“そろそろ、覚悟を決められた方がよろしいかと思えます…”

ついに、この時が来たと思った。覚悟はしていたつもりだったのに…その言葉を聞いて想像以上に早かったコナンの病は、死を待つしかないのかと諦めるしかなかった…。

悲しそうな蘭を見るなり、先生は言った。

“蘭さん…死を宣告してから今日で丁度一ヶ月ですね…コナンくんちゃんと頑張っていますよ。まだ、生きたいという気持ちがある限りは大丈夫ですので、それまで蘭さんの笑顔を見せてあげてください。”

“はい…”

2ヶ月と言われてから、もう一ヶ月もたつたんだ。たった一ヶ月でこんなに病気が悪化してしまうなんて…でも、この一ヶ月…コナンくんはずっと、病気と戦って頑張っていたよね…。

私たちは何もできないし、してあげられない。ただ、見守るだけしかない。それがどうしようも無い事くらい、わかっていたのに…まだ、コナンくんは苦しめられる病気から、逃れる事ができないんだ…。

そんな事を考えてると、先生は言った。

“ 蘭さん…コナンくんは、病気の事、話しませんか？ ”

“ えっ?? ”

“ 多分、コナンくん自身、気づいてる様な気がしますが、ちゃんと話してあげましょう? ”

海での出来事を話しつつ、

蘭はコナンが病気の事を薄々気づいている事を先生に伝えた…。そして、病気のこと、話す決意をした。

“ じゃあ、コナンくんが目を覚ましたら、呼んでください ”

先生はそう言って病室を後にした。

蘭は眠っているコナンの顔を覗き込みながら、点滴や注射の跡でいっぱいのコナンの腕をさすっていた。

コナンは覚悟を決めていたんだ…。薄々気づいていた病に侵され続け、必死に生きようと頑張っていた事を思うと、とてもいたたまれない気持ちになった。

体力が限界に近づいてるコナン。蘭はコナンに伝えられた言葉が頭をよぎる。

「蘭ねーちゃんの笑顔が一番好きだからさ」

“コナンくん…”

（まだ、コナンくんを奪わないで）

蘭はそう思い、ギュッとコナンの手を握っていた。

## 本当の病気

“う…ん…ん……”

蘭に手を握られながら、その青白い顔の瞼がゆっくり開かれる…。

“コナンくん…”

“よう、大丈夫かあ？”

蘭や小五郎、平次や和葉が見守る中、キョロキョロするコナンは、ここが病院である事を察した。

戻って来てしまった…。と寂しそうな顔するコナンに、お医者さんから話がある事を伝えた…。

“大丈夫かな？コナンくん…”

“うん、大丈夫…ケホケホッ…”

咳をしながらも、答えるコナンはとても大丈夫だとは思えない。

そして、コナンに本当の病気の事を話し始めた…。

“コナンくんも、薄々気づいてると思うんだけど…コナンくんの病気は扁桃腺ではないんだ…とても難しい病気でね、今のコナンくんの体力では治す事がとても難しいんだ”

黙って、先生の話しを聞き続けるコナン。やっぱり、思っていた通りだと、確信する。

“これまで、苦しい思いをして頑張ってきたね…コナンくん、君の命は残り少ないかも知れない…でも、諦めちゃダメだよ…一日でも長く生きよう。それが、今のコナンくんにとって一番大事な事だからね…”

“うん、わかった。”

先生の話しを聞いていたコナン告げられた本当の事…それはあまりにも酷なはずなのに…なぜか、コナンの顔はすっきりしていた。

本当の病気を知る事ができたことに、ホッとしたのかも知れない…。病院に戻ったコナンの身体はそれから間もなくして、異変を感じていた…。

体力を少しずつつけて行ったコナンだったが、嘔吐がなくなると同時に、再度発作が始まっていった。

嘔吐の苦しさがなくなる代わりに、喉や心臓の痛みが激しくなった。

## あの子の事

コナンに本当の病気を告げた事を皆に知らせた次の日、哀は博士を連れ、大事な話をしにやって来た。

病室に入ると、コナンの鼻に挿入された酸素チューブが目に入る。

コナンの病気が、そこまで深刻化している事…そして…もう時間がない事を確信すると、話さずにはいられなかった。

“博士、服部平次くんがそろそろ来るはずだから連れてきてくれる？”

“ああ、わかった…。”

そついい、博士はいったん病室を出て行った。

残された哀は、眠っているコナンを黙って見ていた。

(工藤君……)

“ん……ああ……”

“工藤君？”

“あつ？はい…ばら……”

目が覚めたコナンは、灰原の存在を確認する。

“工藤君…少し、話せるかしら??”

“えっ？ああ。ケホケホッ…”



咳をしながら返事をするコナンは起き上がろうとするが”辛いならそのままでもいいわ”という灰原の言葉に、大丈夫だと言って起き上がった。それを見て、哀はベッドを起こしてあげた。

そうこうしてるうちに、平次を連れて博士がやってきた。この4人の共通点… たった一つ… 工藤新一。

“工藤君… 医者から宣告されたようね… 聞いたんでしょ？ 本当の病気…”

“ああ、聞いたよ…”

“貴方が話せるうちに聞いておくわ… 彼女の事、どうするつもり？”

“彼女って… 蘭の事か??”

“ええ。貴方が… 江戸川コナンが死んだあと、帰るはずもない工藤新一をひたすら待つ事になるのよ？ かと行って、貴方の正体を今バラせば、彼らの標的にされるわ…”

考えてないわけではない。どんな状況になっても、コナンから目を離さなかった蘭に…。 正体話を話そうかとも思っていたが、今はどうすればいいのか、分からずにいた。

“私に提案があるのだけど… のめるかしら？”

“提案…？”

博士や平次も何を言い出すのか不思議に思い、哀の言葉を待った…。

“貴方が死んだ後、工藤新一の声で話すわ…” 俺は、事情があつて… 外国へ行く事になった。戻る事はないと思う” っつて… その事情はまだ、考えてないけど… 貴方が死んだと聞かされるより、彼女の負担は少ないと思うの…。”

それを聞いていた平次は哀に尋ねた…。

“ けど、ねーちゃん…死んだ事ちゃんと言った方がええんちゃうか？”

“ いいけど…彼女、ちゃんと受け止められるかしら？江戸川コナンと工藤新一は別として伝える訳だから、彼女は二人同時に失う事になるのよ？今だって、あれだけ思いつめてるのに…”

それを理解して、博士と平次は哀の言う事を従う事にした。

“ 大丈夫じゃ、新一くん…哀君に任せておけば、心配ない”

“ ああ、ケホケホツ…けど…蘭はそれで納得するのか？”

博士がなだめるが、コナンは疑問をぶつける…。

“ 納得…しないでしょうね？でも、納得してもらおうしかないのよ…もう工藤新一とは会えないんだから。大丈夫…たっぷり時間をかけて納得してもらおうから…”

ニヤリと笑う哀を見て、コナンは不思議に思ったが、今の自分の力では何も出来ないと思うと、任せるしかなかった。

“ 悪いな…灰原…ケホツ…いろいろ迷惑かけちゃって…ケホケホツ…”

言いながら、咳き込むコナンだったが、そのうち胸を抑え前のめりになっていった”

“ はあ…はあ…”

“おい、工藤：発作か??”

心配する平次はすぐさま先生を呼んだ…。ベッドを下げてとの哀の要求にすぐにベッドを元の位置に戻した。

そのあと、先生が来るまで博士はコナンの背中をさすり続けた。

## だんだん深刻化してゆく病

ナースコールを押すと、すぐに先生が来てくれた。

“コナンくん、大丈夫だからね、深呼吸するよ、吸って、はい、”

……”

“はあ……はあ……”

そついいながら、コナンに深呼吸を促した。コナンは目を閉じ、辛そうにシーツを掴み、深呼吸を懸命に行っていた…。

暫くすると、落ち着いたのか呼吸も楽になって来たようで、コナンを仰向けにすると…酸素ボンベを口に当て、空気を送り続けた。

点滴を変え、布団をかけると…心配そうに見ていた平次たちに声をかけた。

“大丈夫ですよ…ですが、この調子だと発作が多くなるかもしれないですね…呼吸も弱くなっていますし…また、何かあったら呼んでください”

先生は病室を出て行った。胸を抑え、やっと呼吸をしているコナンに近寄る二人…。それに気付कि、コナンは小さな声でポツリと言った。

“悪いな…はあ…はあ……”

“そう思っただったら、一日も長く生きる事ね…あの子の為にも…”

“ああ…”

そんな話をしていると、蘭が和葉を連れて入って来た。

“あら～みんな来てたの？服部くんここにいたのね…急に居なくなるから、どこに行っただかと思っただよ～”

“平次、出かけるんやったら、一言言ってからにしーや”

“しーないやろー”

三人の様子が違う事に気づいた蘭が不思議そうに聞いた。

“何かあったの？”

“発作を起こしたんじやー”

“これからは、発作の回数が多くなるでしょうって…”

“そう…”

博士や哀の言葉を聞いて…胸を抑え、懸命に呼吸をしているコナンを覗き込み、蘭が心配そうに尋ねた…。

“大丈夫???”

“大丈夫…だよ…”

その小さな声は蘭の問いかけにも無理して答えたような感じはしていた…。これ以上、心配かけないようにと。そんなコナンの頭を撫でながら”無理しないで”と思うのだった。

笑ってよ…

それから程なくして、発作の回数も日に日に増して行った。初めは一日に2回程度だった発作が4〜5回にまで増えた。

その様子を見ていた蘭は、ずっと心を傷めていた。どうしてこんなにコナンくんを苦しめるんだろう。こんなに苦しい思いをさせるくらいなら、いつそ…早く楽にしてあげてと残酷な事まで…考えるようになってしまった。

そんな様子を感じたのか、コナンは蘭を見て、小さな声で言った。

“蘭ねーちゃん…はあ…ごめんね、心配かけて…はあ…はあ…ぼく、まだ頑張れるから…生きれるから…はあ…だから、心配しないで…はあ…”

“コナンくん……”

発作の後、いつもこうしてコナンの手を握っている蘭…。コナンを握る蘭の手が震える…肩を震わせ、コナンの手を額に当てると静かに泣き始めた。

“ごめん、コナンくん…泣かないって決めたのに…こんな思いさせちゃって…頑張ってるのにな、コナンくん、ずっと頑張ってるのに…でも、もう…”

“蘭ねーちゃん…笑ってよ……”

蘭の言おうとしている事を分かったのか、その言葉を遮り、コナンはにっこり笑って言った。コナンの手に額を当て泣いていた蘭の顔が姿を現す。

“ごめん、コナンくん…そうだよね…笑わなきゃね……”

コナンの言葉でなんて事を言おうとしたんだろうと反省しつつ、コナンに精一杯の笑顔を見せてあげた。

また、コナンも辛い顔を押し殺し、蘭に笑顔を見せた。

二人の視線がぶつかる中…諦めちゃいけない事を蘭は思い知らされたのだった。

## 握れない手

いつものように、コナンの食事に付き合っていた蘭。

“はい、コナンくん”

といい、コナンにスプーンを差し出した。蘭からスプーンを受け取ったはずのコナンだったが…。

？ガシャーン？

コナンは手を滑らせ、床に落としてしまった。スプーンを洗いに行こうとした蘭と入れ違いに、哀と少年探偵団は入って来た。

“あら、みんな〜。コナンくんなら中にいるわよー”

といい、いったん病室を出ていった。

“どうしたの？なんか慌てて出て行ったけど…蘭さん……”

“あっ、いや〜”

慌てながら病室を出ていった蘭の様子が気になり、コナンに声をかけた。

“何？何かあったの???”

“さつき、俺、スプーン落としちゃってさ、ゴホゴホツ…それで蘭ねーちゃんが洗いに行っただんだゴホゴホツ……”

“たくっ、気をつけなさいよ”



半ば呆れながら言う哀。コナンの咳がひどくなってる事に気が付いたあゆみはコナンに近寄り、心配そうに尋ねた。

“コナンくん…大丈夫？？咳ひどいよ”

“大丈夫だよ…心配ねーって…夕方になると…ゴホゴホツ…いつもこうなんだ…”

口を抑えながら話すコナンの声がかすれてる様に感じていた。

“お待たせ、コナンくん…はい、スプーン…”

“ありがとう、蘭ねーちゃん…”

スプーンを洗い、病室に戻って来た蘭からスプーンを受けとるが、またしても落としてしまう…。そんな様子を見ていた探偵団と哀もまた、心配が募る。

それを心配した蘭はコナンの手を取って、まじまじとみた。

“手…どうしたの？”

“何でもないよ…ゴホゴホツ…ただ、手が滑っただけだから…”

“そんなはずないでしょ？私の手、握ってごらんなさい”

平気な顔して言うコナンに皆の心配が襲つ…。

“大丈夫だよー”

蘭の手を握ろうとしないコナンに蘭は？お願い？とすごむと、泣く泣くコナンは手を握り返した。

“コナンくん…”

手を握り返したコナンの握力が凄く弱くなってる事に、蘭の心配は大きくなる。

“今日は私が食べさせてあげる”

そう言うと、再度洗って来たスプーンをコナンの口まで運び、食べさせた。

食事が終わると…先生が来て、コナンの手をチェックしていた。

“握力が低下してますね…コナンくん、もしかして手が痺れてるんじゃないかい？”

“えっ？う、うん…”

自分自身の手が動きにくくなっている事…隠しているつもりだったが、身体がだんだん異変を感じてしまい、これ以上は隠せない…そう思っていた…。

その様子を見ていた蘭達は、コナンが懸命に手を動かそうとしている事に胸を締め付けられる思いがした。

先生が病室を出ていった後、蘭はコナンと話していた。

“大丈夫？手…”

“大丈夫だよ…”

握力の低下で手が動きにくくなっている筈なのに、それでも弱音を言わないコナン…。そんな蘭は、コナンにお願いをすることにした。

“ねえ、コナンくん…約束してくれる？”

“えっ？”

“これからは、ちょっとでも何か身体に異変を感じたら、言って欲しいの…だって、コナンくんには一日でも長く、生きて欲しいから

…”

“蘭ねーちゃん…”

あの日の海の決意から、心配をかけまいと、どんな事でも頑張って生きていたコナン…弱音をはかず、いつでも笑顔でいた…でも、それは逆に蘭達を心配させていた事に申し訳なさでいっぱいだった。

“そうよ、貴方が無理をすれば、その分長く生きられないかもしれないのよ！何かあつたら、なんでもいいなさい…それにこれは、貴方の為だけに言ってるんじゃないのよ…貴方を心配する人の事も考えなさいって言ってるのよ。”

哀の心配する言葉を思い、探偵団の皆もコナンに詰め寄り、“お願い”と頼み込んだ。

次の日から食事の時は…コナンの手にスプーンを包帯で固定して食べる事になった。

## 身体の限界

次の日の夜、手に包帯でスプーンを巻きつけて食べることになった。この日も蘭は、コナンの食事に付き合っていた。

”大丈夫だよ、コナンくん・・・ゆっくりでいいから、落ち着いて食べてね・・・”

”うん・・・。”

蘭の言葉に、不器用ながらも・・・ゆっくりと、食事を口に持つてくコナン・・・。スプーンをすくおうとする手が震える・・・。腕の力が、弱くなってるからと言って、周りの人がやってあげてしまうのはよくないといわれ、蘭は、少しずつでもいいからコナンにやらせようと見守っていた・・・。

私たちわ、見守ることしかできないんだね・・・。でも、ううん、そうじゃない・・・見守ってあげることができるんだよね・・・。いつかの日、コナンに言われた”ありがとう”は、弱り切っていた、蘭の心に光を差す・・・。

小五郎に事情を聞いた英理が、コナンの様子を心配してやってきた・・・。

”大丈夫・・・？コナン君・・・”

とても、大丈夫だとは言えないコナンの様子を見ながら声をかける英理・・・でも、少しでも生きてる証が欲しくて・・・声をかけずにはいられなかった・・・。小五郎もまた、そんなコナンの”大丈夫”の声を聞いて心配な思いで見守っていた・・・。

”ゴホゴホ…ゴホゴホ…”

そのあとも、やっとの思いで食べてるコナンだったが突然むせだしてしまった…。なかなか止まない咳に、急いで先生を呼ぶとペンライトを片手に、コナンの喉を診察し始めた…。消毒を挿してもらい、しばらくすると咳は止んだので…。再び食事を始めた…。

ゆっくり食べていたコナンだったが、慌てて口を塞ぐコナン…。目をパチパチさせながら、身体を固めてしまった。蘭も、その様子になぜ口を塞いでいるのかすぐわかった…。嗚咽と一緒に漏れる何かが零れる音…。

”コナンくん、見せて…。”

蘭の言葉に、ただただ首を振るだけのコナン…。次第に、コナンの目が潤んでいく…。その瞳から零れる涙は…。激しい痛みには耐えられなくなっていた事を、物語っていた…。

”蘭、どいてみる…。”

”あなた…。”

英理の止めるすべもなく、小五郎は懸命に口を覆っていたコナンの手を無理矢理解き、コナンの口から解放した…。その瞬間、その場にいた人達の顔が青ざめる…。コナンの口と手には、少量ではあったが、口から血が付いていた…。吐血…。それは、コナンの身体が限界に近いことを訴えていた…。

”血じゃねーか…。”

急いでナースコールを押し小五郎。すぐにきた先生からは”心配な  
さらないように”との、言葉をかけられた。すぐにコナンはタンカ  
に乗せられ、緊急治療室に運ばれた。

## 最期の可能性

“あなた…コナンくん相当悪いのね…様子を見て分かったわ…”

“もう、身体が限界来てるらしい…まだ、自分で食べる事が出来る  
てるだけで、マシだそうだ…”

“そう…”

ガラガラと音と共に、戻って来たコナン…これまで何度ストレッチ  
ヤーで運ばれた事か…。幾度となく、身体の異変を感じ…発作を起  
こし、何かある度に運ばれて行った。

血を吐いたが、洗浄したので大丈夫だという医者という言葉にホツとし、  
ストレッチヤーに乗ったコナンを覗き込むと…大きな目をパチパチ  
させて笑っていた…。そんなコナンを見ると自然と口元が緩む…。

それからもういつもの様に哀は相変わらず探偵団と一緒にやって来  
ては、コナンの身体の具合を聞いては帰った…まるで医者のような態  
度で…。そんな、哀の様子を不思議そうに見るコナン…。

“きつと哀ちゃんも辛いのよ”

“照れてるだけだつて”

“きつと、そのうちまた、来ますよ”

という、探偵団の声かけに頷くコナン。コナンをだんだんと蝕んで  
ゆく病によって、声がかすれて、出にくくなっていたコナンは、医  
者から“あまり声を出しちゃだめだよ”と言われていた。

それでも、出そうとするコナンは蘭や小五郎に怒られてしまつ…。

そんな日々を送っていたある日…。

“毛利さん…”

医者から呼ばれた蘭と小五郎…。今まで面白い話なんて聞かされた事がなかった為か、そう呼ばれる度に、心臓が一つなる。きつと、また嫌な話であろうとさみしそうな顔をして先生の後へついて行く。

会議室に通された、小五郎と蘭は…そこで思いもよらぬ事を聞かされた…。

“実は…ある方からの提供でコナンくんの治療法が見つかりました…ですが、今のコナンくんの体力が弱り切っていて、手術を行う上で体力がついて行けるかが不安ですね…”

“本当ですか？？でも、手術で助かるかもしれないですよね？”

“……はつきりいしましょう。手術をして助かる見込みは五分五分です”

喜ぶ半面、助からない可能性もあると言われたが、蘭の気持ちはすでに手術の言葉で埋め尽くされた。ゼロじゃないその状況が、生き残る可能性に近づいた事で、コナンくんを助けてあげられるかもしれないと思うとなんだか、嬉しくなっていた。

“このまま、手術をしないで死を待っている時間より、手術をして助からなかった場合では…後者の方が、コナンくんの命は残り僅かになります。体力の問題もありますから。昨日のコナンくんの検査では、ギリギリ手術出来る体力の数値に達していましたが、早目の決断がいいでしょう。幸い…ご家族の方がすぐに決断されたので安



心ではありませんが、コナンさんの意志も必要です。話しますか？”

“はい、私がコナンさんに話します…”

明るく答えた蘭の言葉に医師はホツとし、手術の日取りやコナンの体力を見た上で決行しましょうといい、話はそれで終わった。

諦めていたコナンの命が救われるかもしれない。手術をすれば、例え50%の確率だったとしても助かる可能性はある…そんな蘭の様子を見ていた小五郎は蘭の肩を抱き、良かったなと声をかけた。

## 手術前のピンチ

手術の話聞いた蘭はもしかしたら、コナンくんは助かるかも知れないと…期待を胸に膨らませ、コナンにこの事を話そうと病室に戻った。

“ 蘭さんっ、コナンくんが、コナンくんがっっ… ”

蘭の姿を見つけると、慌てた様子で駆け寄る光彦に促され、蘭と小五郎はコナンの病室に急いだ。

コナンの容体が急変したらしく、コナンの心臓は心停止していた。心拍数の機械音と共に医者や看護師がコナンのそばに近寄り心臓マッサージを試みていた。

“ 1 . 2 . 3 . 4 . 5 . . . コナンくん、コナンくん… ”

コナンを呼びながら、懸命に心臓マッサージをするが、心臓は停止したまま反応がない。

( コナンくん、戻ってきて )

蘭やそこにいた人達はコナンの異常な光景に目をやりつつ、祈っていた。このまま、手術受けられずに死んでしまうの??

( お願いコナンくん…戻ってきてコナンくん…!! )

“ 離れて… ”

そう言うと先生は、心配蘇生を行った。ドクンと音がすると同時に、コナンの身体が大きく揺れる…もう一度心配蘇生を試みるが、心停止したままだった…ダメかと諦めかけていたその時、ピッピッと音がし…コナンの心臓は再び動き出した…。

何とか命は繋がれたものの、手術できる体力はあるのだろうか？と不安になる蘭…。目を覚ましたコナンにどう話そうかと、蘭は一人、考えていた。

その夜、何とかピンチを脱出したコナンの心臓に手を当てて、小さいけど確かに心臓が動いている事に、蘭は安心できるのであった。

## 少年探偵団の思い

友達の命が危ない…もう、救うことはできない…。そう、思い知らされた少年探偵団達。

幾度となくコナンの発作を目にし、一つの命の重さを子供ながらに感じていた。

せつかく出来た友達なのに、もうすぐお別れが来てしまう。誰にも救えないその病気に一人で戦っていたコナンを見てみると辛くて、泣いてしまうことさえあったが、ずっと我慢をしていた。そんな自分たちをコナンがみれば、逆に励まされてしまうことは分かっていたから。

コナンが元気な時、皆を必死に守ってくれた。どんなに危険な時でさえ励まし、絶対大丈夫だといい、ピンチを乗り越えた。

そんなコナンが今はこうして病と戦っている…。残り少ない命を一日でも長く生きようと…本当は辛いのに、コナンの見せる顔はいつも笑顔だった。

最期まで笑って送り出すことに決めたとはいえ、刻々と近づいている命のカウントダウンはあまりにも、子供の心では恐怖が押しかかる思いがしてならなかった。

“そんな顔したら、江戸川君が悲しむわよ”

哀の言葉に励まされて来た筈なのに、死の恐怖が押しかかるに連れ、少年探偵団の心はそんな言葉もだんだん励まされる事ができなくな

っていた。

刻々と近づいているコナンとの別れは、今確実に子供達の気持ちの  
灯火が消え失せる事にも近づいている…。

最期まで笑ってあげよう探偵団…祈りが大きければ、きっと奇跡だ  
って起きるはずだから…。

## 迷い

その夜…蘭は一人鎮静剤を打たれ眠っているコナンの病室へ入っていった。コナンの心臓にそつと手を当て…。

“大丈夫…生きてる……”

何度も何度も自分に言い聞かせ、眠っているコナンの手を取り…自分の手でコナンの小さな手を覆い被せた。

“蘭…”

小五郎の呼ぶ声がし一度病室の外へ出ると、英理も一緒にいて、心配そうに娘の事を見つめていた。

“らん、どうするの？コナン君にいうんでしょ？”

“お母さん…コナンくん、まだ起きてる…手術したら…もし助からなかったら…コナンくんはもう生きられないんだよね…”

“貴女、何を？”

蘭らしくない弱気な言葉を聞き、英理は娘が何を言わんとしているのか汲み取っていた。ずっとコナンを支え、看病していた蘭にとっては、コナンとの別れが迫っている事に恐怖さえ芽生えて来たんだろう。

蘭の心は心停止したコナンの事を思い、手術の話をする事に怖くなっていた。

(もし、今度コナン君が心停止を起こした場合、覚悟を決めてくだ

さい)

先生から告げられた、恐ろしい言葉。普通の発作でも怖いというのに…尚もまた、告げられた恐怖に…蘭は手術の話をする事を拒んでしまう。普段、何も考えずに呼吸をし、生きている…でも、コナンにとっては呼吸をする事がどんなに大変か。上手く呼吸が出来なければ、発作が起きてしまう。

それこそ、誰かがそばにいて呼吸の手助けをしないと呼吸が出来ずに死んでしまう。そんなコナンを思うと、蘭はこれ以上の辛い思いをコナンにさせたくない一心で、小五郎と英理に気持ちを話した。

“蘭、お前の気持ちは分かる。だが、このまま何もしなければ、コナンは死ぬのを待つしかないんだぞ？またいつ、心停止するかわからねーし…やるだけの事はやってやろうじゃねーか？”

“お父さん…”

“そうよ、蘭…それに成功する可能性だってあるのよ？貴女が弱気になってどうするのよ？それに、生きるのも死ぬのも可能性半分じゃない。諦めちゃだめよ？”

“お母さん…うん、そだね…”

涙いっぱい蘭は小五郎と英理の言葉に頷き、諦めかけていた自分の心を立ち直らせようとしていた。

“そやでーねーちゃん、あの坊主だってまだ諦めとる訳ちゃうで？生きとるんやから”

“蘭ちゃん、やるだけやってみいひん？”

” 服部くん、和葉ちゃん…”

三人の会話を聞いていたのか、帰った筈の2人が戻ってきた。する

とそこへ、またしてもその話を聞いていたのか、姿を現した者がいた。

“ 蘭おねーさん、あゆみたちからもお願い…コナン君に手術受けさせてあげて ”

“ おねがいます ”

“ 助かるかもしれねーしな ”

“ そうね、このまま指を啜えて待つてるなんてマネするより、少しでも可能性のある手術受けさせてあげたほうがいいんじゃない？ ”

子供達の言葉に蘭は心を打たれ、先程まで迷っていた自分に笑みがこみあげてきた。

“ みんな…ごめんね、そうだよ、助かるかもしれないだもん。

コナンくん話すわ ”

蘭の言葉にそこにいた全員の顔には、笑顔が戻った。小五郎や英理もそんな娘の姿にホツとしている。

そうよ、皆も心配してる…私だけじゃない…コナンくん生きてほしいと思ってるのは皆同じじゃない。だめよ…コナンくん奪っちゃ…。

蘭の心の迷いが消え、コナンに手術の事を話す時がきた。コナンはどう思い、どう返事するだろう？なんにしても、コナンの命を助きたい気持ちが整い、あとは病室の扉を開けるだけだった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4168x/>

---

君の笑顔が生きてる僕の証

2011年10月19日03時09分発行